しぶき

2005年6月

第47号

日本野鳥の会 三重県支部

特集： 三重の里山

http://www.amigo2.ne.jp/~miebirds/

ビオトープ考

辻　秀之（四日市市）

ビオトープと言う言葉も随分定着してきたように思います。とうとうＮＨＫの朝ドラにまで登場しましたが、その中身はどうも今ひとつピンと来ません。

ビオトープの本来的な意味は、ドイツ語のBio（生き物）+Top（場所）を意味する言葉として、Biotop（＝「生き物の住む空間」）となる合成語だそうです。これからすると森林や草原、湿地などの生態系、またそれらがセットになった一定の広がりもビオトープということになります。一方、ＮＨＫの朝ドラにも登場したような一般に捉えられている？ビオトープは、限られた空間の中で池や水槽をつくって水を張り、水草を植え、野生の生き物を放し、少し奢ったものは池の中に浮島があったり、観察用のウッドデッキがあったり、いわば一定のアイテムを組み合わせて作られたものを指しているような気がします。こうしたある種パターン化したビオトープに対して、淡路花博の折に「ビオトープセット」なるものが展示されていて、思わずのけぞりました。ある大手の造園業者の展示だったと記憶していますが、今ではすっかり商品化されて市場に出回っています。ビオトープづくりの作業はふつうボランティアによる手作りで、造成から材料の調達まで相当にじゃまくさい作業でもありますが、一気にお金で解決できますよ、という何とも心理の微妙なところをついた心憎い商売です。でも生き物に対しても人に対しても何ら思いやりが感じられません。

目　　次

巻頭エッセイ ----------2
特集：三重の里山
　里山特集にあたって ----------3
　里山の変遷と野鳥 ----------3
　里山をおおう孟宗竹 ----------6
　伊賀の里山 ----------8
　里山について ----------8
　ボーボー里山探鳥紀行 ----------9
　鼓ヶ岳アカガエルの里で湿田の
　　生き物を守る ----------10
　ハナと私の里山散歩 ----------12
　三重県の里地里山保全活動について ---13
編集部からのお願い ----------14
アートギャラリー ----------15
調査・研究のページ
　三重県の野鳥未報告記録　その２ -----16
　標識付ズグロカモメを２冬連続確認 ---18
　千葉から飛んできたホシハジロの回収 -19
特別寄稿：六条干潟 ----------20
今日も鳥日和 ----------23
会員のページ
　私のバードウォチング ----------24
　南島町沖で海鳥観察 ----------24
連載：野鳥と貨幣 ----------26
支部活動のページ ----------28
野鳥情報 ----------30
探鳥会報告 ----------31
編集後記 ----------36

表　紙　の　言　葉

里山

川口久美

子供の頃、「故郷（ふるさと）」という唱歌を習った。

当時の歌詞は文語体のものが多く、意味も分からず退屈だったのか、私は音楽の時間に騒いでよく先生から注意を受けた。

若い女先生は持て余したに違いない、あるとき担任の男先生に言いつけられこっぴどく怒られた。

春の日の昼下がり、もうすでに故人となられた恩師を偲び、「ごめんなさい・ありがとう」を念じつつこの歌を口ずさみながら、歌詞とあまり変わらぬ少年時代を送った里山へと続く道を描いた。

学校ビオトープという言葉もあります。学校にあるビオトープが特別なものなのかどうかは別にして、総合学習の目玉として登場し、その実践例も枚挙にいとまがないほど普及しています。我が子の通う小学校でも、今あるコンクリート池を改修して学校ビオトープを作りたい、と僕のような者のところにも相談が来ました。しかし待てよ、、、子供の通う学校の周りには、人と仲の良い二次的な自然がまだたくさん残っています。いきなりビオトープの設計に入るのではなく、まず子供達が学校の周りの自然を調べて、田圃のビオトープ、川のビオトープ、神社林のビオトープなどを記入したビオトープマップを作る。そして学校の周りにどんなビオトープが配置していてどんな生き物が暮らしているのか、不足しているものは何か、どんな環境を増やしたらどんな生き物が喜ぶか、など意見を出し合って、自分たちの学校ビオトープの姿を描いてゆく、というようなプロセスこそ大切な気がします。学校によって個別に事情は違うはずなのに、金太郎飴のような「ビオトープ」を量産するのはなんだかなぁ、と思ったりするのですがいかがでしょう。

＊

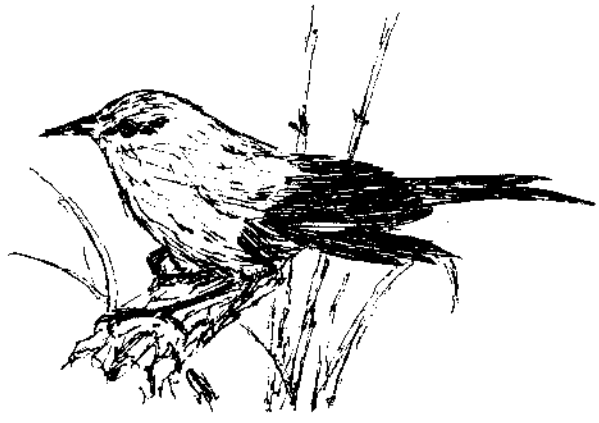
ネットで「ビオトープ」を検索すると全国のおびただしい取り組みがヒットします。中には「新たな自然の創造」などという、神をも恐れぬ大胆な謳い文句も目にします。ビオトープの流行でいきものを取り扱う技術も随分進歩したようです。しかし技術ですべてがコントロールできる、というような発想にはどうしても馴染めません。自然を呼び戻そうという心意気や良し、しかし，控えめに謙虚に、生き物たちのお手伝いをする、くらいの気持ちでゆっくりと時間をかけて取り組む姿勢が欲しいものです。

里山特集にあたって

「しろちどり」では2000年8月の28号で里山の特集を組んでいます。その頃からも里山はどんどん変化しています。今三重県の里山はどうなっているでしょうか？再び特集を組み、里山について考えてみることにしました。さらに三重県の自然環境室の方にも文を書いていただきました。もう緑濃くなった里山、梅雨の合間を見計らって、あなたの近くの里山へもでかけてみませんか？

（編集部）

ウグイス



里山の変遷と野鳥

平井正志（安芸郡 安濃町）

里山とは

里山という言葉を聴いてどんな山を思い浮かべるでしょう。大多数の人はクヌギやコナラ、あるいはアカマツの明るい林の山を思い浮かべるのではないでしょうか？たしかに以前はそんな明るい山が人の住処や田の周囲に多くありました。またさらにその奥の山にも落葉樹の林が、ところによっては1000m近くの標高まで連なっていました。この山林はどのようにして生まれたのでしょう。三重県は温暖で、雨も多く、林は放っておくとしだいに暗いシイやタブの常緑樹の森になるといわれています。たしかに、社の森だけでなく、櫛田川流域より南では山の斜面のあちこちにシイの森が比較的多く残っており、初夏に黄色い花を咲かせます。ただし、自然に任せてシイやタブの森になるには数百年が必要だといわれています。しかしながら、人が手を加えるとそうはなりません。以前は松の葉

を肥料として田にすきこまれていました。また山の柴を取って燃料としていました。その結果、山に肥料分が蓄積せず、林は貧弱になり、アカマツばかりの山になったと考えられています。またもっと標高の高い山でも、炭を焼くために、炭焼きが山に入り、数十年に一度、木を切って、炭にして、担ぎ下ろしました。その結果、切られても株　元から新芽が出て、すぐに再生する、クヌギ、コナラ、リョウブなどの木が優先する森ができあがりました。山歩きをしていて、株立ちになった落葉樹を見ることがありませんか？それは炭を焼いていた山なのです。里の周りにはこのように人手を入れられた明るい林が広がっていました。

里山の変遷

里山利用の終焉

しかし、このような身近な山にも変化が始まりました。石炭（家庭では練炭やタドン）、もっと後には石油が燃料として使われるようなると木炭の需要がなくなり、炭焼きがなくなります。奥山の伐採は終わります。さらに里に近い山でも松葉に代わって化学肥料が使われ、柴をとる習慣がなくなりました。人々が山を利用する習慣はおそらく今から50年くらい前になくなったと思います。すると徐々に栄養分が土壌に蓄積し、常緑樹への移行が始まり、山がしだいに暗くなります。しかし、この時点での自然現象としての常緑樹への移行はごくゆっくりとしたものであったでしょう。

スギ・ヒノキの植林

さらに変化がありました。植林です。第二次大戦中に山の木は戦争のために著しく伐採されました。それを回復する緑化運動は国民運動として取り組まれました。その際植えられた木はスギやヒノキです。これらは材木としては申し分のない木であり、山林の持ち主に将来の収入を約束するものと考えられてきました。そのため、すでに木が生えている部分も伐採して積極的にスギやヒノキを植える植林が盛んになり、国は補助金を出して、植林を奨励しました。植林は奥山だけにはとどまらず、里に近い山にも広がりました。また本来スギに適さない、急峻な斜面にも植えられました。三重県の中部以南では田のすぐそばまでスギ・ヒノキの植林が広がっています。しかし、伊賀地方ではなぜか植林は少ないようで、まだ落葉樹林が広がっています。スギは枝打ちや間伐など手入れを必要としますが、人手不足や木材価格の低迷で、放置された植林が多数見られます。よく手入れされた植林は少ないといっても過言ではありません。

マツノザイセンチュウ

マツノザイセンチュウとよばれる小さな虫は最大の侵入害虫でしょう。北アメリカが起源であると考えられています。この小動物はアカマツやクロマツの樹体内で繁殖し、導管につまり、水を送れなくして、枯らしてしまいます。このセンチュウは昆虫の体について移動し、マツを次々と枯らして行きました。西日本のアカマツ林はことごとく枯れてしまいました。松の枯れたのを大気汚染やその他の原因に求める人もいますが、全国に及んだこの現象を説明することはとても無理でしょう。研究者には受け入れられていません。さて三重県でも低山のアカマツがことごとく枯れました。伊賀ではまだ少し残っているところがありますが、遅かれ早かれ、影響を受けると思います。山林の持ち主はマツの枯れた後、スギ・ヒノキを植林するか、そのまま放置するかのどちらかでした。そのまま放置するとマツの下に生えていたヒサカキなどの低木が伸び、その後種々の木が繁茂し、次第に常緑樹に移り、里山というイメージにあったクヌギやコナラの明るい林になることはないようです。

ゴルフ場、工業団地の建設

高度成長期のゴルフ場建設は三重県の里山に大きな影響を与えました。三重県にゴルフ場は現在79箇所もあります。平均130haであり、総面積で実に102 km^2にもなり、現在の津市の総面積と同じになります。これらは比較的低山、すなわち里山をつぶして作られました。オオタカのつがいの生息域を200haと仮定すると実に50つがいの生息が可能であった区域が失われたことになります。工業団地や住宅地もまた低山をつぶして作られました。

モウソウチクの繁茂

たけのこを取る太い竹、モウソウチクは人が

竹材やたけのこを利用するために植えた外来植物です。竹やたけのこを取って利用している間はあまり広く繁茂しませんでしたが、近年プラスチックの利用が多くなり、竹を取ることが極端に少なくなりました。モウソウチクは隣接する林の中に侵入し、木を枯らし、徐々に広がっています。全国的にも問題ですが、三重県では特に北勢地方で竹林の拡大が顕著なようです。

野鳥にとっての環境変化

以前の里山ではウグイスなどムシクイ、カラの類、キツツキ類、ヒタキ類、ツグミ類、ヒワ、カケス、そしてそれらを襲うオオタカ、ハイタカ、ノスリなどの猛禽、カエルを狙う猛禽サシバ、沢筋ではオオルリ、キセキレイ、ミソサザイ、カワガラス、ヤマセミなどが見られたでしょう。里山には実のなる木があることも重要だったでしょう。津市近郊の神戸里山での1年間の野鳥調査報告が「しろちどり37号」に掲載してあります。

スギ・ヒノキの植林地やモウソウチクの竹林に鳥が少ないことはよく知られています。暗いスギの林ではまれにカラの類が見られる程度です。モウソウチクの竹林に鳥は全くといってよいほどいません。ゴルフ場での野鳥棲息の実情はわかりませんが、地上採食のムクドリ、キジは生息しているでしょうが、公園に似た環境であり、本来の林の鳥には棲みにくく、鳥の種類も限られているのではないでしょうか。これらの場所に棲める鳥はごく限られてしまったといえるでしょう。

アカマツの枯れた後、放置された山林はどうでしょうか？当初はサルトリイバラが繁茂し、藪になっていましたが、今ではコナラ、クヌギ、ヤマザクラ、ケヤキなど様々な木が茂っているようです。またタブノキが入り込んでいる場所もあるようです。しかし、一気に暗いシイの森に変わるのではないようです。ウグイス、やわらかい木の実を食べるヒヨドリ、メジロが多いことは目立ちます。しかし、カラ類、キツツキ類など多くの鳥が棲息しているのではないのでしょうか？残念ながらこれを詳しく調べた報告はありません。

里山の将来をどうするか

このような里山をどうすべきなのでしょうか？少なくとも管理を放棄されて本来の目的を失った植林の一部やモウソウチクの竹林は手を入れる必要があるでしょう。モウソウチクの竹林は伐採して雑木の林に戻すべきでしょう。さらにスギ・ヒノキの植林はよく管理されたとしても、単純な生態系で、野鳥をはじめニホンザルやイノシシなど、さまざまな生物を受け入れることができません。もし、海外からスギを食害できる昆虫が入りこめば、マツノザイセンチュウを同じように日本中の山が丸裸になります。またスギの林は保水力に乏しく、降った雨をすぐに川に流してしまうといわれています。三重県中部から南部のあまりにも多い植林地は再検討すべきでしょう。

里山をめぐる二つの意見

しかし、昔の里山はこのままでは戻りません。このような里山の現状をどうすればよいのでしょうか？二つの意見があります。

ひとつは以前のような明るい落葉樹林の里山をもどすために、積極的に人手を入れるべきだという意見です。たしかに以前のように柴を取り、松葉を掻けば以前の里山が戻ると思われますが、それは大変な労働です。さらに奥山で炭を焼くのは現代人には耐えがたい重労働でしょ

ハチクマ

う。ごく小規模な林ではボランティアーなどの働きでこのような取り組みがされているところがあります。三重県でも赤目の森などで取り組まれ、全国でもさまざまな取り組みが始まっています。しかし、それも山林の地主の同意がなくてはならず、広い面積をカバーする運動にはなりません。どのようにすればかつてのような里山を復元できるのでしょうか。広い面積の里山の復元には行政の力が必要であることは間違いありませんが、まだ解決策はないようです。

もう一方で里山を自然の移り変わりに任せておくほうが良いとの考えもあります。三重県の気象条件では土壌の条件のよい場所ではコナラ、クヌギなどの落葉樹からしだいに常緑樹への移行が始まり、数百年後にはシイの暗い林になるでしょう。しかし、土壌条件の悪い場所や急峻な場所では常緑樹への移行が十分に進まず、結果として多様な自然が保たれると考えられます。むろん棲息する野鳥の種類も移り変わるでしょう。アカマツ林が枯れて放置された山ではこのような移行が少しずつ進みつつあるようです。

さて三重県の里山はどうすればよいのでしょうか？そのために私たちには何ができるでしょうか？近くの山に出かけて鳥を見ながら考えてみようではありませんが。

里山をおおう孟宗竹

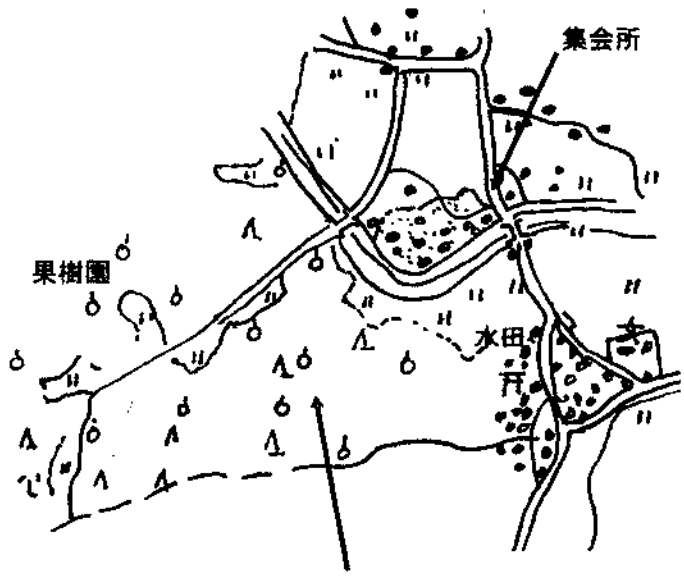
近藤義孝（桑名市）

５月は若葉が最もきれいな季節、スダジイの若葉が目立ちます。ウグイスやホオジロのさえずりが聞こえ、水田には植えたばかりの苗が並んでいます。

５月の連休は私の住む地区では多度神社での上げ馬神事が行われます。祭りのために集まった地区の集会所から見ると、昔は雑木林と果樹園が広がっていた南の山に竹藪が繁茂し、「力尾の山（集会所の南に見える山）も竹藪におおわれてしまった。」と村の年寄りたちが嘆いていました。

そこで、どれくらい変化したのかを調べてみました。国土地理院の１９７０年の５万分の１の地図（桑名）と現在を比べてみました。（図）

1970年（昭和45年）　桑名郡多度町北猪飼・猪飼・力尾付近（現在は桑名市）



川沿いの水田と植林されたスギやヒノキの針葉樹とスダジイやタブノキなどの広葉樹が混ざっている。

この当時は多度の丘陵地ではミカンがたくさん栽培されていた。

また、柿の木も水はけの良い場所に植えられていた。

高度成長真っ盛りの時代、都市近郊にあり、労働力として、会社つとめをする兼業農家が多くなっていった時代だった。

このころから、少しずつ山が荒廃を始めていったようだ。

主に果樹園や針葉樹の山

三重県北部における竹藪

以前は桑名市西部や四日市市北部などの丘陵地には里山の一部に孟宗竹が植えられ、管理されていました。桑名市の大山田団地周辺は筍がたくさん採れていました。今は、竹藪の多くは、団地になっています。しかし、丘陵地の谷にあった水田や丘陵地に開墾されて作られた果樹園などが放棄されました。そしてそこには、放棄された竹藪から竹が根を伸ばし、密生した竹藪となっているところがあります。また、里山を構成しているクヌギやコナラなどの樹木も竹に押されてその分布域を減少させています。

管理された竹藪

毎年筍を掘り、管理されている竹藪の場合、林床への日差しもあり、筍は竹藪の中で生えることが多いです。林床にはヤブランなど陰性植物がところどころに生え、竹の落葉がうすく敷き詰められ、軟らかい土となっているところでおいしい筍が採れます。竹の密度は傘をさして歩ける程度がよいと言われています。

管理されなくなった竹藪

竹藪を長く放置すると、筍は林内に密生し、幹の直径は細くなり、林床は薄暗くなります。この林の中を歩こうとすると、密生した竹がじゃまになり、困難を極めます。また、竹の落ち葉が深く積もっています。地下茎は竹藪の外側へ伸び、外側へ広がっていく勢いが増していきます。

竹の利用法

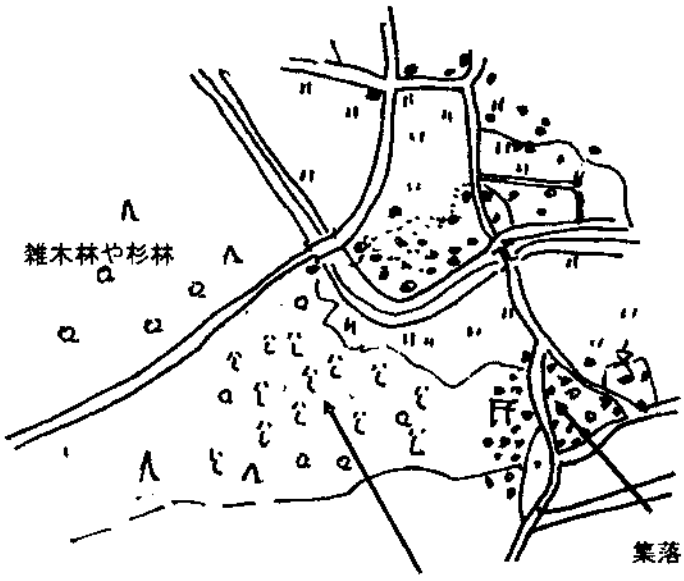
竹は筍を採る以外に、いろいろな生活道具の材料として使われてきました。今は、プラスチックなどにとってかわられたものが多いのですが、ざるなどはそば屋などでよく見かけます。

プラスチックなどと比べると、タケなどの天然素材は壊れたら、土に戻すことが容易であるなど環境に優しい材料である。

竹の拡大を防ぐには

林外へのびてきた筍を採るときは、大きく成長したものを倒すとよいと言われています。小さな筍の場合、地下茎に蓄えられた栄養分がまだ残っているので、次から次へと筍を作るため、栄養分を十分吸収した大きくなった筍を切り取るとよいようです。また、できるだけ竹が密集しないようにこまめに筍を採るのも拡大を防ぐのに有効です。

2005年（平成17年）



竹藪が拡大し、山全体が竹藪に見える。

新しい道路がたくさんでき、東の山では、宅地開発が始まった。

また、山間の水田の多くは放棄され、灌木やススキなどの荒れ地となっている。更に時間が経ち竹藪となっているところもある。

まず、里山の手入れができなくなり、さらに果樹園などの手入れができなくなった。植林されたスギ・ヒノキも間伐などが行われていないところも多い。さらに谷間などの水田から徐々に耕作放棄される水田も増加した。

伊賀の里山

伊賀ブロック長　塗矢 尋一

伊賀盆地には、どこに行っても里山が、いっぱいありますが、何ヶ所か紹介します、まず私の住んでいる府中地区は笠置から阿山の方まで山がのびていますその中でも低いほうの山のふもとで生活をしています。山から南は家が点在していてそれより南に行けば柘植川があり、さらに南へ行くと田んぼがある地形です。山の方にはシジュウカラ、ヤマガラ、ジョウビタキ，キセキレイ、セグロセキレイ、ハクセキレイ、メジロ、キジバト、カワラヒワ、他にも多くの小鳥たちが近くの家の方まで下りてきます。また南に行けば柘植川があり、そこには、オオタカ、ノスリ、ヒバリ、ウグイス、オオヨシキリ、カワセミ、冬にはカルカモ、マガモ、コガモ、バン、カワウ、イカルチドリも見られます。それより南に行けばケリ、モズ、タシギ、ヒバリ、セッカ、ツグミ、チョウゲンボウ、トビ、カワラヒワ、アオサギ、コサギ、チュウサギ、ダイサギ、ゴイサギ、ムクドリ、など多くの鳥が見られる。それは、山のすそには、水田用のため池がたくさんあるので、小鳥が繁殖しやすく里にはえさとなる実もたくさんあるのです。２つ目は府中より西に行きますと、山もだいぶ高くなり野間、高旗山まで行くと、夜にはヨタカ、タマシギ、アカショウビンの声も聞かれます。やはり，山あり，民家あり、池あり、川あり、水田があるという条件のもとで、人間も鳥たちも共同に生活をしているという事がわかります。又盆地の真中にある上野公園にはイカル、アオバト、ビンズイ、他多くの小鳥たちが見られます。公園の周囲には民家があり城には掘があり、公園内には実がなっていて鳥にとっても、生活の出来る所といえます。そうした盆地の地形が鳥たちを大切に保護しているようです。

里山について

北川和則（多気郡勢和村）

里山と言えば昔は村にとって無くてはならない所でした。炭を焼いたり薪を取ったり椎茸を栽培したり、自分にとってはメジロを捕まえたり秘密基地を作ったり兎を追いかけたり、村の生活の一部になっていました。動物も今より沢山いました。サシバが営巣したりもしていました。それが時が経つにつれ、里山は皆の心から忘れられていきました。あれ程手を入れていた里山が荒れてゆき貴重な植物や動物が姿を消していきました。何故そうなったのか、生活環境が変わったからでしょうか、薪がガスになったり、炭が石油に変って、時代の流れになったのでしょう。ますます便利になって、若者は皆都会へ出て行き、村には年寄りが多くなり、里山を守っていく人が無くなり、台風などの災害が多くなり、村を守るべく里山は逆に人々を追い詰めた。そして今人々はようやく里山に対する考え方が変わり、環境破壊だった事に気付き、森を育てるべき下草刈や、間伐等の処置をし、段々と昔に戻りつつあります。以前に居た動物や鳥・植物等が戻って来たように思われる。里山はそこの地域に住む人は勿論の事、他の人々も自然を大切にしていかなければならない。
それは里山は自然のバロメーターだからです。

シュンラン

ボーボー　里山探鳥紀行

ボーボー（津市）

「三重県を代表する里山を訪問して、珍鳥を発見し、里山の王者オオタカをカメラに収め、これを機関誌しろちどりの記事にし、あわよくば里人の目をかすめ山菜などムニャムニャ」。しろちどり鬼の編集長の厳命（でも取材費なし）を受け、4月23日（土）快晴の日、（でもスギ花粉も満開）、勇躍（本当は仕方なく）名張市の近鉄赤目口駅に向かった。

赤目地区の里山案内をお願いしたのはこの地をマイフィールド（縄張りともいう）とし、挨拶、貢物（おにぎり３ケで可）がなければ、一歩もその縄張りへ入ることを許さないと豪語するN氏である。そして同行者は、この後に、恐ろしくも悲惨な運命が待っているとも知らず、能天気に参加いただいた、マダム4名であった。その中には、しろちどり編集委員ひいては編集長の座をねらおうと、キヤノンＥＯＳ２０Ｄ＋４００ｍｍ望遠レンズを携え、愛車イストを駆ってはるばると奈良県から参加いただいたマダムＴもいる。

赤目口駅ですでに案内役のN氏がニコニコと余裕の態度でわれわれを迎えてくれた。

「これから赤目エコリゾートへ車で出向き、そこから1時間ほど歩いて春の里山を楽しみ、旨い昼飯を食べるのだ」と綿密かつアバウトな今日のプランをのたもうた。仰せに従い、車を走らせると、周りの田んぼではすでに田植えの準備に入っており、数羽のアマサギが耕運機のあとを追ってエサを捜している。すかさずマダムＴが大砲レンズ（大きいレンズ）を向けて連写。ボーボーはお手軽ニコンクールピクス5200カエル目玉レンズ（小さいレンズ）で1枚。この差は大きい。ボーボー編集委員の座は危うい（でもそれはいいかも）。

赤目エコリゾートへ車を停めて、ココロウキウキ歩き出す。近くの鎮守の森は今日がお祭りのようで、スピーカーからのどかな雅楽が聞こえてくる。時刻は10時をまわっており、鳥はすでにその朝の営業時間を終了し、木の陰から怪しい訪問者に警戒の眼を向け、息を潜め、その気配を消しているところはさすが忍者の里と感心する。それでも川のせせらぎをバックにウグイスやシジュウカラ、ヤマガラがさえずり、朝寝をしたアオゲラが朝食を捜して飛んでいるのを目にすることが出来た。

舗装された道をそれ、狭い山道に入る。木々はちょうど芽吹きを迎え、萌黄色、若草色、ミントグリーンとあらゆる緑の絵の具に染められている。田んぼには既に水が張られ、足元にはスミレ、ショウジョウバカマ、サワオグルマ、キツネノボタン、あとわからずなどの花が咲き、蕗、たらの芽、蕨などの山菜が満ちている。「タンポポには西洋タンポポと関東、関西、白花の日本タンポポがあり、それらのハイブリッドもあったりして・・・」とのマダムＯの学術的論旨をありがたく拝聴し、しかし目だけは鳥探しは忘れても、山菜探しを忘れてはいない。里山のまさに春を満喫しここは地上の楽園、天国のひとかけらかと思われる。

再びアスファルトの道へでるとトトロに出てくるようなバス停があり、近くにタンポポが一面に植えてある畑が突如現れ，双眼鏡で覗くと、タンポポと書いた名札まで立ててある。何故タンポポを畑で栽培するのか、何故名札が必要なのかについて、白熱した議論を戦わせ、鶏小屋にいる雄鳥のとさかを双眼鏡で

セグロセキレイ

じっくり観察し、生物進化に思いを馳せる。橋上から小川を双眼鏡で見ると小魚が群れている。何でも双眼鏡で観察しないと気が済まないのはバードウオッチチャーの悲しい性のようだ。

その時、「どうも道を間違えたようだ」とのN氏の緊急発言をうけ、そういえば歩きはじめてから既に1時間を経過しており、初めて己の置かれている厳しい現状にやっと気が付くあなた任せの参加者一同であった。『無謀なハイカー、里山で遭難！・バードウオッチング遭難で救助隊出動！・野鳥の会の恥さらし！』新聞のみだしが脳裏をよぎる。

しかしそこは人生経験豊かな一同、心の動揺など顔には出さず、「とりあえず川に沿って下ろう」とのN氏のとりあえず提案をすなおにうけいれることにした。家並みが途絶え、車も通らないような道をひたすら1時間、何処を歩いているのかよく判からなったが、近鉄のガード下をくぐり、国道を歩いてもとの赤目エコリゾートに戻ったのは出発してから3時間を経過していた。

その間もマダム達はお喋りを楽しみ、コゴミを見つけ、タラの芽にチェックを入れ、あれはウワミズザクラかウワズミザクラか、アザミの葉は天麩羅にすると旨いか、タンポポコーヒーの作り方は、その味はブルーマウンテンを凌駕するか、この鹿の糞状態の硬い木の実は何か（後日マダムOからムクロジと連絡あり）など己に迫っている危機などまったく気にしていない。内に秘めた強靭な精神力（現状認識の甘さ、危機に対する無頓着ともいう）に改めて感心する。

その後、車に置きっぱなしにしてあった弁当を携え、赤目エコリゾートのトラスト広場で遅い昼食を取り、これもトラストのとんぼ池でサシバを観察、マダムT、Oが撮影に成功し、以前お茶を飲んだ赤目エコリゾートで一服しようと建物に入り、椅子に坐ってコーヒーをお願いしたが、「今は喫茶はやっていません、デイサービスになっていますので…」と申し訳なさそうな係りの女性。道理でテーブルの上に血圧計が置いてあった訳だと納得し，外へ出るとウグイスのホケキョウを合唱している春の里山がまだそこにあった。

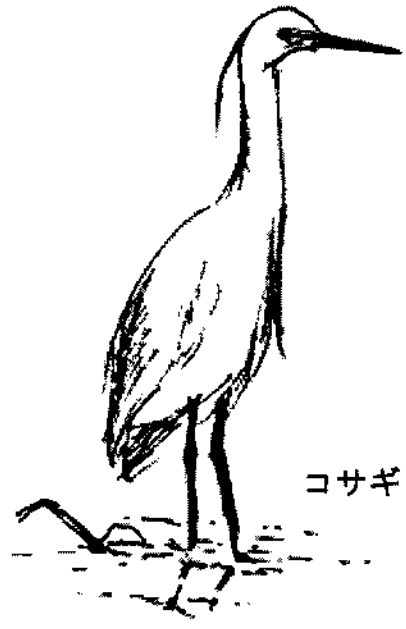
里山探鳥におけるボーボー5つの格言

1 知らないところへ出かける時は、たとえ雑木林とて地図を持っていこう。
2 装備に気をつけよう。特に靴と雨具。
3 腹が減るとヒトは突然怒りだす。人間関係を大切にするなら弁当とお茶は携帯しよう。
4 花の時期は植物図鑑を忘れずに。きっと新しい発見がある。
5 いつまでもあると思うな、親と喫茶店。諸行は無常である。

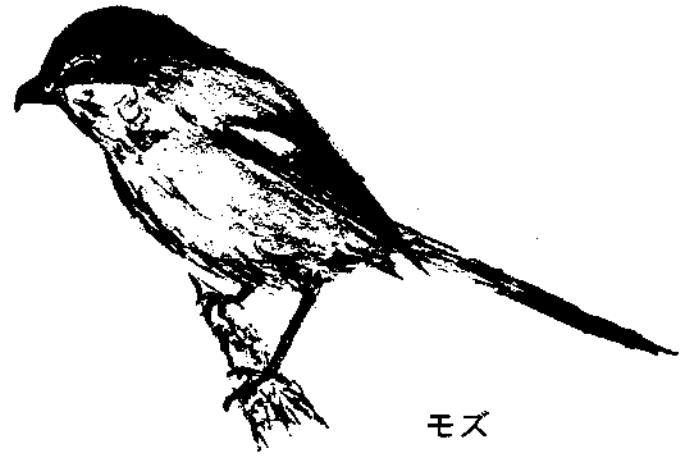
鼓ヶ岳アカガエルの里で湿田の生き物を守る

吉居瑞穂（伊勢市）

昭和49(1974)年、伊勢の市街地の南にある鼓ヶ岳山麓の現住所に引っ越してきた。柿畑や水田をつぶして造成された小さな住宅地だった。それでも、我が家から南側は谷川に沿って、まだ水田、柿畑、竹藪、林などがあって、その先は鼓ヶ岳に続いていた。家の周りにはゲンジボタル、サワガニ、カブトムシ、色々のヘビ、カ

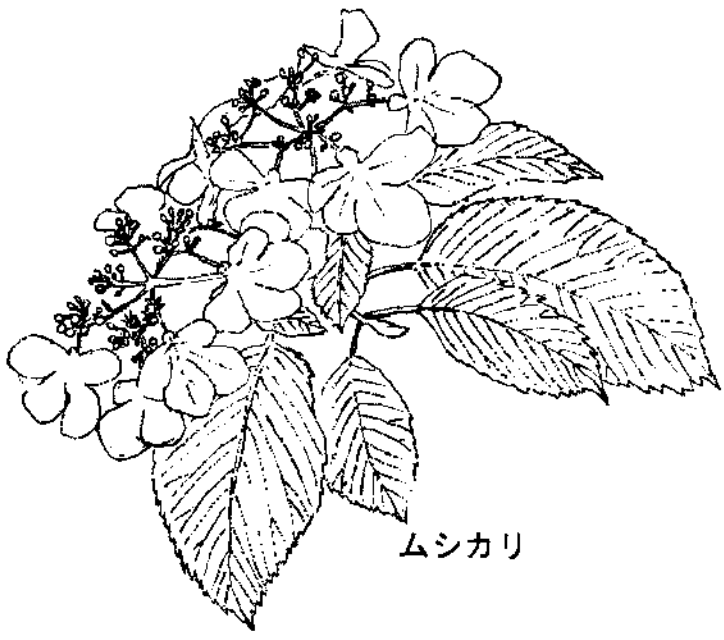


エル、リス、そして色々の鳥がいた。地元の老人の話では、強い農薬のため生き物がいなくなった時期があったが、農薬が規制されるようになってまた戻ってきた、ということだった。でもこの30年の間にこのあたりの里山はすっかり変わってしまった。山麓には伊勢自動車道が通り、山をけずり田を埋立てて住宅団地があちこちに造成された。サワガニやホタルが住む田は生活排水で汚れ、サシバの営巣もなくなり、アカガエルが産卵できる湿田もほとんどなくなってしまった。　そんな中で、奇跡的に残っている大小8枚の山田（山あいの田）があり、毎年、ヤマアカガエルが400～500卵魂も産卵していた。この田んぼの周りの雑木林には小鳥も多く、冬はルリビタキやミヤマホオジロなどを見に行くのを楽しみにしていた。この田んぼではイノシシ、シカ、サルの被害があり、「ここが休耕田になったら困るね！」と仲間と話していたところ、去年（2004年）から休耕田になってしまった。



モズ

そんなとき、ある県会議員を通じて地主の許可が得られて、この田んぼを湿地として維持する作業を6人で始めることになった。谷から水を引き込み、出口をふさげば湿地は簡単に維持できるものと思っていたが、すぐに水が抜けてしまい、湿地を維持するのはなかなか大変なことを思い知らされた。水漏れと大水対策に悪戦苦闘し、ようやく4枚の湿地ができた。1年目の昨年は水が抜けて浅くなったところで、卵魂やオタマジャクシがカラスに沢山食べられてしまった。2月下旬、ヤマアカガエルの産卵がピークを迎えると、日中も産卵に出てきたカエルの声がにぎやかだ。ピョンピョンはねるカエルを狙って、ノスリがやって来ることもあった。今年もヤマアカガエルのオタマジャクシはかなり減ったが、去年よりはずっと生存率が高く、今、元気に泳ぎまわっている。これに続いてアマガエル、トノサマガエル、シュレーゲルアオガエル、ツチガエルが産卵する。4月に入るとトンボの仲間が次々と訪れ、夏にかけて泥の中はヤゴが一杯になる。その他の水生昆虫では、タイコウチ、ミズカミキリ、ゲンゴロウの仲間、などを見かける。また泥の上に残されたイノシシ、シカ、タヌキの足跡やふんを見つけるのも楽しい。田んぼの水生雑草ではコナギ、ミズオオバコ、キクモ、ヒルムシロが多いが、オモダカも見られる。周りの土手にも春から秋にかけて、色々の花が咲く。里山のシンボルであるサシバがいつか戻ってくるかもしれない、と夢を見ながら、この小さな湿地を見守ってゆきたい。



ムシカリ

ハナと私の里山散歩

川口久美（津市）

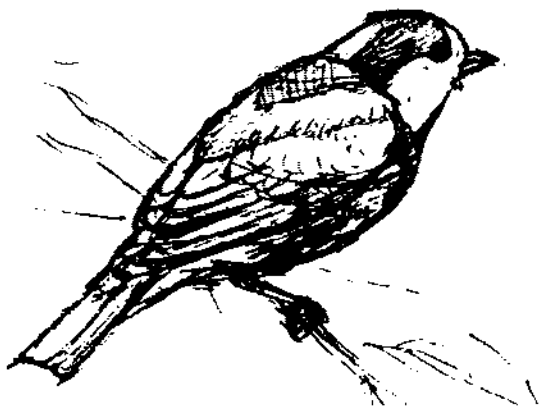
我が家の愛犬「ハナ」は今年で１２歳になる。人間の年齢で言うと７０歳ぐらいに相当するらしい。７０歳といえばとっくに定年を迎え、「悠々自適」の身分のはずだが、犬には定年がないので、やむを得ず日がな一日我が家の玄関で警備業務に従事している。

もっとも「悠々自適」のほうはかなり前から実行していて、本業務のかたわら、生垣の間から顔を出して外を通る小学生に愛嬌を振りまいたり、鼻先に来たトカゲと遊んだり、ガス検針の女性に吠え立ててこちらは嫌われたりと、きままな毎日を過ごしている。

そんな彼女がいま、一番の楽しみにしていることは私と一緒に行く散歩であるらしい。

というのは、加齢のせいかあるいは悟りの境地なのか、最近恍惚の表情で日向におなかを向けて寝ていることが多いが、そんな至福のひとときでも、私がリードを手に持ち長靴を履くのをいち早く察知し、前脚を伸ばしてストレッチをし、「早く行こう」と嬉しそうに催促するのである。散歩は通常、団地を抜け出て近くの農道を一周し、１５分ぐらいで「ハイおしまい」となるが、三度に一度ぐらいはさらに東に広がる田んぼ道を突っ切って歩くこと２０分、そのまた東にある低い山まで足を伸ばすことがある。

ヤマガラ



『ハナと私の里山散歩』の始まりである。この里山は私が子供の頃には、春の山菜取り、夏の山間の池での泳ぎ・魚取りと懐かしい思い出のいっぱい詰まった場所である。秋冬は山の松林に入ると、落ち葉の散り敷いた地面からビンズイの群れが飛び立ち、尾をひくひくさせて枝にとまってこちらを見下ろしていた。少し歩くと陽気なシジュウカラやエナガの群れに出くわす。歩きつかれて松の木にもたれて座ると、頭の上ではエナガたちが通り過ぎた後、こずえを渡る松風の音に混じって、「チリリ　チリリ」とキクイタダキのか細い声が聞こえて来ることもあった。散歩途中、ハナは立ち止まっては道端のにおいをかぎマーキングに余念がない。私は私でポケットから取り出した双眼鏡を覗いたり、山の畑にいる同級生の農家のおばさんと話し込んだりと、それぞれのんびり忙しい。

近年里山は、立ち枯れた松の木が多くなった。そして同時に、ビンズイ、キクイタダキやエナガは姿を見せなくなった。入れ替わりに、コゲラ・アカゲラ、シメやイカルがやって来た。イカルの透明な声を聞きながら山道を歩いていると、ハナが猛禽の食痕らしい散らばった羽毛を見つけたりする。私はご相伴にとその一枚をポケットにしまう。咲いている野の花を手折り持ち帰ったり、野良仕事中の知り合いに逢って季節の野菜を頂いたりすることもある。ハナはと見ると、乾燥ミミズを大事そうに口にくわえていた。お互い、おみやげも結構多いのである。

先日、帰宅が遅くなり夜中の散歩となった。気が急くハナに引っ張られて農道に出ると、田植えが終わった田んぼでは、「ゲコ　ゲコゲコ・・・」と沢山の蛙が鳴いているのに驚いた。数年前からは、初夏になると蛍があちこち飛ぶようになった。ゆっくりとではあるが昔の自然が戻りつつあるのだと嬉しくなった。「蛍はいるのかな？」とあたりを見回しても、さすがにまだ季節が早すぎるのかその光は見えない。月明かりを見ると、東の野の端に黒くうっそりと里山が横たわっている。ハナと一緒にたびたび訪れる里山も、今は、私の思い出をそっと包み込んで、静かに眠っているようだ。

三重県の里地里山保全活動について

三重県環境森林部自然環境室

農林業などを伴うさまざまな人間の働きかけを通じて、里地里山の環境は、形成・維持されてきました。しかし、社会経済状況の変化とともに開発や農地放棄が進み、その豊かな自然と生態系が失われつつあり、里地里山を保全する取組は、自然とのふれあいの場を守り、多様な生態系を確保していくため、重要になってきています。

三重県では、平成１５年度に「三重県自然環境保全条例」を改正し、「多様な自然環境の保全」、「生物の多様性の確保」、「自然とのふれあいの確保」などに関する規定を拡充しました。そして、「里地里山保全活動計画の認定」、「みんなで自然を守る活動の認証」を始め、認定・認証団体へ技術的な助言や情報提供をしています。平成17年3月現在、認定・認証団体は、全部で12団体あります（表1）。詳しくは、ホームページ「みえの自然楽校」の「里地里山ほのぼのだより」（http://www.eco.pref.mie.jp/shizen/gakkou/）をご覧いただくか、三重県自然環境室　（電話059－224－2578）、各県民局生活環境森林部へお問い合せください。

ここでは、先日活動に参加させていただいた「PPK四日市」をご紹介します。

PPK四日市は、四日市市の北部に位置する暁学園内の雑木林を、学校の財産としてだけでなく自然環境条件の整った「地域の里山」として保全し、学生達の自然観察の場、地域住民の自然との触れ合いの場として活用することを目的に、週２回、主に繁殖している孟宗竹の伐採をはじめ、不要な雑木類の間伐、木々の手入れ作業により雑木林の整備を行ってみえます。従来、竹は各地で建築材、家具、竹細工、タケノコ等への利用目的で栽培されていましたが、たいへんな繁殖力と生命力を持っているため、伐採を怠るとたちまち大きく育ち、根を広げ周りの植物の栄養を奪ってしまいます。

暁学園内の雑木林にも、竹が生い茂り、他の樹木が枯れたり、根を広げる場所を無くして斜めに育ったりしていたそうですが、PPK四日市の皆さんの根気よい作業のおかげで、今は、一度は枯れかけた樹木から新しい枝が育ち、林の日当たりもかなりよくなっています。伐採した竹は、枝をはらい、決まった長さに切りそろえます。竹は思ったより大きく育っており重労働で根気のいる作業ですし、のこぎりも何日もしないうちにダメになってしまうそうです。PPK

表　里地里山保全活動計画認定団体・みんなで自然を守る活動認証団体一覧

	団体名	活動地域
認定	ほうすけクラブ	いなべ市
	保々の自然に親しむ会	四日市市西村町内
	特定非営利活動法人　PPK四日市	四日市市萱生町字城山
	学びの森　川口演習林の会	白山町川口字榎谷
	育樹会	松阪市飯高町大字宮前字カサコケ山
	南勢テクテク会	南勢町内瀬字水落谷他
	特定非営利活動法人　赤目の里山を育てる会	名張市上三谷
	山と海をつなぐ会	北牟婁郡紀伊長島町十須字中谷地内
認証	赤川自然に親しむ会	菰野町赤川
	上野自治会ほたるを守る会	鈴鹿市八島川及び周辺地域
	特定非営利法人　NPO　三重の里山を考える会	久居市明神町、津市神戸
	月例自然観察会「ふわふわ～む」	松阪市

四日市の皆さんは、会社を定年退職した後、健康な間は体を動かしたい、人との交流を持ちたいといった理由で参加がされた方が多く、自分たちのためにも、それぞれのペースで続けてみえる様子がうかがえました。なお、竹は、別の日に作業場へ運び竹炭にするそうです。

このような、人手が入らなくなってしまった雑木林を手入れすることで、かつての里山環境を取り戻す活動は、みんなで力をあわせれば大きな力になります。多様な自然環境と生態系を次世代に残すため、各地で里地里山を守る活動が広がることを期待しています。

―編集部よりのお願い―

しろちどり50号記念
カラー写真・表紙絵募集

支部報「しろちどり」は来年3月で50号を迎えます。そこで50号は記念号として、野鳥のカラー写真を掲載します。会員の方々のすばらしい写真を募集します。ふるって御応募ください。ただし、巣での写真など、繁殖を妨害するおそれのあるものは掲載いたしません。また県内での撮影に限ります。形式は、スライド、カラープリント、JPEGファイルのいずれでも結構です。撮影データと共に、送ってください。スライド以外は返却いたしません。応募は1人2枚までとします。掲載枚数に制限がありますので、多数の場合は選考いたします。

また表紙の絵も募集します。カラーで印刷します。応募多数の場合は選考いたします。

締め切りは共に2005年12月末日です。

プライバシー保護

カット募集

支部報「しろちどり」に掲載するカットを募集しています。野鳥、野生動植物、山野の風景など、鉛筆でもインクでもかまいませんが、原則として網掛けをしないため、鉛筆の中間トーンはでません。彩色した原画でも白黒で印刷します。受付随時

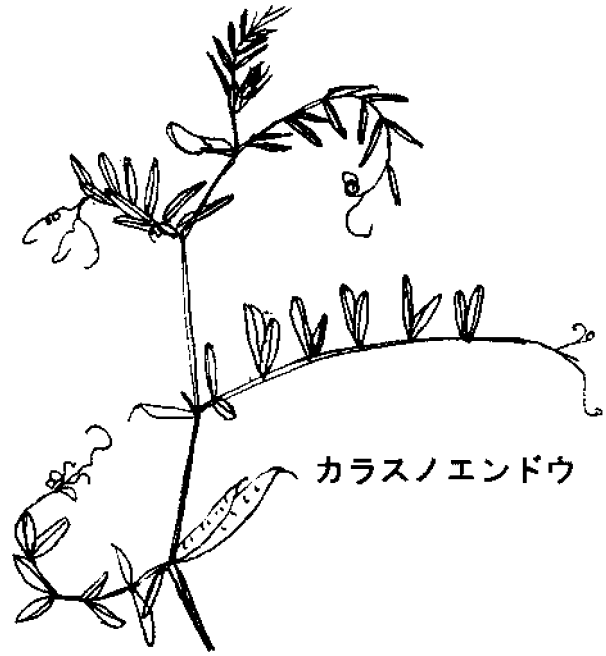
プライバシー保護

原稿募集

「しろちどり」の原稿を募集しています。日ごろの野鳥観察などについて、「会員のページ」に掲載します。また、野鳥の生態などを調査した結果は「調査・研究のページ」に掲載します。なお原稿は手書きでも受け付けますが、なるべくワードプロセッサー（MSワード、一太郎）を用いてください。支部報は2段組みになっていますが、原稿は2段にせず、「べたうち」にしてください。ワードプロセッサーを用いた場合はテキストファイルにしていただければ幸いです。誤字脱字、段落の有無などは編集部で適宜変更しますが、原稿の大きな改変は著者に相談します。2次情報の公開については情報元の了解を得てください。また他の著作からの転用、引用については著作権に注意して下さい。

随時受け付けます。

受付：岡　八智子



マイフィールドで越冬したシギたちの残像

私のデジカメ探鳥記から
津市　石原　宏

町屋海岸のミユビシギ
三重県の豊津浦から町屋浦にかけては全国的にも有数の秋期におけるミユビシギの渡来地で、今年は100羽以上が越冬したと思われる。

三雲町曽原でセイタカシギとアオアシシギ
海岸堤防内のクリーク地帯で。

香良洲海岸のダイゼン
秋は数十羽の群だったが越冬したのは数羽。

三重県の野鳥の未報告記録　その２

多田 弘一（松阪市）

前回に続き、三重のメモ鳥ＭＬ(MMM)の仲間が確認した県内の野鳥の記録の内で、埋もれさせるには惜しいと思われるものを報告する。

7．ツクシガモ Tadorna tadorna

a．1羽：2001年01月30日、熊野市
久生屋町、中井節二

b．1羽：2001年01月30日、南牟婁郡
鵜殿村、中井節二

a．b．は同一個体の可能性あり

c．1羽：2002年12月12日、松阪市高須町
金剛川河口、横山真一
翌13日、同地にて多田弘一追認

d．1羽：2002年12月15日、一志郡三雲町
五主雲出川河口、多田弘一

e．2羽：2003年01月25日、一志郡三雲町
五主雲出川河口、横山真一
翌26日、同地にて玉置高志追認

f．1羽：2005年01月30日、伊勢市
東豊浜町調整池、多田弘一
同日同地、嶋田春幸・さつき追認

g．2羽：2005年02月04日、伊勢市樫原町
宮川、多田弘一

h．1羽：2005年02月08日、津市高洲町
安濃川河口、多田弘一

8．トモエガモ Anas formosa

a．1♂：2001年01月21日、度会郡南島町
奈屋浦こがれ池、嶋田春幸・さつき

b．1♂1♀：2002年01月03日、津市
長岡町緑の街、岡八智子

c．4♂1♀：2002年12月12日、一志郡
香良洲町雲出川河口、多田弘一

d．1♂1♀：2002年12月31日、津市
長岡町緑の街、岡八智子

e．4♂3♀：2003年02月06日、四日市市
山村町山村ダム、真田英春・ちか

f．1♂：2003年02月09日、鈴鹿市
西玉垣町
石垣池、松井弘見

g．1♂：2004年01月24日、四日市市西村町
北勢中央公園、中尾裕彦

h．1♀：2004年01月28日、伊勢市中村町
五十鈴川、小坂里香

i．1♂：2005年01月16日、松阪市
松崎浦町三渡川、岡八智子

9．シマアジ Anas querquedula

a．3♂4♀：2002年09月16日、一志郡三雲町
五主池、多田弘一

b．1♂：2003年03月27日、一志郡三雲町
曽原新田、玉置高志
同日同地追認、多田弘一

c．1♂1♀：2004年04月24日、一志郡三雲町
曽原新田、玉置高志

d．1♂4♀：2004年09月08日、一志郡三雲町
曽原新田、多田弘一

e．1♂：2005年03月29日、松阪市
喜多村新田町、多田弘一
翌日追認、岡八智子

f．2♂2♀：2005年04月28日、度会郡明和町
北藤原、小坂里香

10．クロガモ Melanitta nigra

a．1♂：2002年05月03日、津市島崎町
安濃川河口、山田孝夫

11．ビロードキンクロ Melanitta fusca

a．1♂：2004年12月13日、津市
御殿場海岸、三浦　悟

b．1♀：2004年12月19日、津市
御殿場海岸、真田英春・ちか

c．13羽：2004年12月24日、津市
御殿場海岸、真田英春・ちか

12．シノリガモ Histrionicus histrionicus

a．1♂若：2003年12月14日、南島町
贄浦漁港、小坂里香・多田弘一
初認当日追認、嶋田春幸・さつき

13．カワアイサ Mergus merganser

a．1♀、2003年03月17日、桑名市
西別所町屋川、横山真一

b．1♀：2003年09月19日、桑名市

西別所町屋川、横山真一
c．1♂：2003年11月27日、鈴鹿市西玉垣町
石垣池、勝谷宜生

14. ナベヅル Grus monacha
a．2羽：1998年11月07日、熊野市
有馬町、中井節二
b．1羽：2003年02月11日、一志郡
三雲町曽原、山田孝夫

15. ヒメクイナ Porzana pusilla
a．1羽：2004年08月29日、久居市
川原木造、安達直孝
同日同地追認、多田弘一

16. ワシカモメ Larus glaucescens
a．1幼鳥：2003年02月10日、一志郡
香良洲町雲出川河口、多田弘一
b．1第四回冬羽：2004年02月14日、
度会郡紀勢町錦、嶋田春幸・さつき
c．1成鳥：2004年12月23日、度会郡
南勢町田曽浦、嶋田春幸・さつき
d．1成鳥：2005年01月04日、度会郡
紀勢町錦、嶋田春幸・さつき
e．1成鳥：2005年01月30日、度会郡
明和町大淀、多田弘一
f．1成鳥：2005年03月10日、熊野市
大泊町、中井節二
g．1第四回冬羽：2005年03月10日、
度会郡明和町、多田弘一
h．1成鳥：2005年03月14日、度会郡
明和町、岡　八智子
i．2成鳥：2005年03月19日、度会郡
明和町、多田弘一

17. シロカモメ Larus hyperboreus
a．1成鳥：2003年01月18日、一志郡
香良洲町雲出古川、山田孝夫
b．1第1回冬羽：2003年11月23日、
度会郡紀勢町錦、嶋田春幸
c．1第1回冬羽：2004年03月16日、
度会郡紀勢町錦、嶋田春幸
d．1成鳥：2005年01月02日、四日市市
吉崎磯津漁港、阿部裕
e．1第1回冬羽：2005年01月07日、
度会郡紀勢町錦、嶋田春幸
f．1成鳥：2005年01月17日、伊勢市磯町
外城田川、小坂里香
g．1成鳥：2005年03月19日、四日市市
塩浜町鈴鹿川河口、阿部裕
h．1第一回冬羽：2005年03月21日熊野市
木本町、中井節二

21. オニアジサシ Hydroprogne caspia
a．1羽：2005年04月17日、津市島崎町
安濃川河口、吉田輝也

22. オオアジサシ Thalasseus bergii
a．2羽：2002年08月22日、一志郡三雲町
雲出川河口、山田孝夫
翌日同地追認、多田弘一

23. ベニアジサシ Sterna dougallii
a．2羽：2004年08月15日、一志郡三雲町
雲出川河口、嶋田春幸・横山真一
b．3羽：2004年08月17日、一志郡三雲町
雲出川河口、山田孝夫

24. ウミスズメ Synthliboramphus antiquus
a．10＋羽：2004年11月21日、津市
江戸橋志登茂川、阿部裕
b．2羽：2004年12月18日、度会郡
南島町沖、嶋田春幸・さつき
c．10＋羽：2005年03月27日、度会郡
南島町沖、嶋田春幸・さつき
d．5＋羽：2005年04月24日、度会郡
南島町沖、嶋田春幸・さつき

24. カンムリウミスズメ Synthliboramphus wumizusume
a．1幼鳥：2003年06月22日、南島町
古和浦沖、嶋田春幸・さつき、
MMMのメンバー数名
b．1成鳥：2005年03月27日、南島町
古和浦沖、嶋田春幸・さつき
c．2成鳥：2005年04月16日、南島町
古和浦沖、嶋田春幸・さつき

25. ウトウ Cerorhinca monocerata
a．1冬羽：2005年03月20日、南島町
古和浦沖、嶋田春幸・さつき
b．1冬羽：2005年03月27日、南島町
古和浦沖、嶋田春幸・さつき
a．b．は、同一個体と思われる。

なお、上記の各記録は、確認数：確認日、確認場所、確認者の順に記した。文末ではあるが、ご協力戴いているMMMの諸氏に厚く御礼申しあげる。なお、三重のメモ鳥MLでは、野鳥好きな皆様の入会をお待ち申し上げております。入会申し込みは、http://www.memotefu.com/memobird/へお越し下されば容易です。

標識付ズグロカモメを2冬連続確認(同一個体)

嶋田春幸（度会郡南島町）・多田弘一（松阪市）

ズグロカモメ Larus saundersi は、東アジアに局地的に分布し、その生息確認総数は、約7000～9000羽とされている稀少な鳥である。中国の渤海と黄海沿岸部で繁殖し、朝鮮半島南西部、日本、中国南東部、台湾、香港、ベトナムで越冬する。　日本での越冬地は、九州がほとんどを占めていたが、近年、越冬例が本州で増加している。その越冬総数は、2003年度の調査で、およそ2500羽であった。　三重県では、かつて本種の越冬個体を見るのは稀であったらしいが、近年増加の傾向にあり、我々が参加した2004年度の越冬ズグロカモメ全国一斉調査では、松阪市金剛川と三渡川河口にて、最多日で48羽をカウントし報告した。　多田は、2004年02月03日、白いフラッグの付いた第一回冬羽の個体を撮影した（写真1）。山階鳥類研究所に問い合わせた結果、尾崎清明氏らが、韓国で標識を装着された個体であった。

＜放鳥記録＞
標識個体：ズグロカモメ雛
標識フラッグ：白地に黒文字　B9（右Tibia）
標識リング：金属リング（左Tibia）KOREA 060-01918
標識日時：2003年06月12日
標識場所：韓国京幾道仁川広域市延壽区松島新都市第2工区、埋立地
標識者：尾崎清明、馬場孝雄、金守一
2003年韓国でのズグロカモメ標識総数：60羽（成鳥10羽、幼鳥50羽）
＜2004年の観察記録＞
標識確認個体：ズグロカモメ第一回冬羽
標識フラッグ：白地に黒文字　B9（右Tibia）

写真1

標識リング：金属リング（左Tibia）
確認日時：2004年02月03日
確認場所：三重県松阪市高須町金剛川河口
確認者：多田弘一

一方、嶋田は、2005年01月25日、本種の標識個体を撮影した（写真2）。この個体は、多田が同地で前年の冬に確認した個体と同一であることが判明し、直ちに山階鳥類研究所へ報告した。

＜2005年の観察記録＞
標識確認個体：ズグロカモメ成鳥冬羽
標識フラッグ：白地に黒文字B9（右Tibia）
標識リング：金属リング（左Tibia）
確認日時：2005年01月25日
確認場所：三重県松阪市高須町金剛川河口
確認者：嶋田 春幸

写真２

さらに、2005年03月08日、同地にて、小坂里香氏が白いフラッグの付いたズグロカモメ成鳥冬羽を撮影された。文字が読み取れなかったので、同一個体かどうか確定はできないが、その可能性は大きく、一冬の滞在を立証するものである　なお、今回の連続２冬の同一個体の確認により、本種は、２年で成鳥と同一の外見に成長することを、実地に学んだ。　稿をおくにあたり、ズグロカモメ全国一斉調査に協力いただいた三重のメモ鳥ＭＬのメンバーに厚く御礼申し上げる。

千葉から飛んできたホシハジロの回収

伊勢市東大淀町在住の岡本忠佳さん（本会会員・鳥獣保護員）が2005年３月22日朝５時半頃ジョギング中、伊勢市東大淀町の海岸公園で半ばミイラ化した鳥の死体を発見しました。脚輪が着いており、三重県支部を通じて、山階鳥類研究所に連絡したところ、足輪の番号から、2004年11月18日　千葉県市川市新浜にある宮内庁新浜鴨場で放鳥された　ホシハジロ♀（放鳥時の齢は不明）であると判明しました。

山階（やましな）鳥類研究所では全国のバンダーと協力し、野鳥に足輪を付けて、再び放す標識調査を行っています。宮内庁新浜鴨場でも標識調査に協力し、毎年、多数のかも類を捕獲し、足輪を付けて放鳥しています。皆さんも足輪を付けた鳥を保護したり、死体を拾った場合には足輪の記号と番号を正確に読んで、山階鳥類研究所に知らせてください。その鳥がどこから来たのかがわかります。このような調査を積み重ねることにより、渡り鳥のルートや野鳥の寿命など野鳥についての多くの情報が得られます。詳しくは山階鳥類研究所のホームページをごらん下さい。

（文責：平井正志）

六条潟　ー開発から保全へー

市野和夫（六条潟と三河湾を守る会　事務局）

六条潟とは

三河湾は、知多半島の先端の幡豆岬と渥美半島の先端の伊良湖岬を結ぶ線によって伊勢湾から区分されているが、外洋との境界は伊勢湾と共通であるため、伊勢湾の中に含めて表現されることもある。三河湾は、篠島・日間賀島を境にして東部の渥美湾と西部の知多湾（衣浦湾）とに二分されている。豊川が流入する渥美湾の最も奥まった部分に広がる一帯の干潟を含む遠浅の海域は、古くから六条潟と呼ばれてきた。六条潟の名前の由来は、宝飯郡方面からの音羽川、佐奈川、現在の豊川放水路のあたりにあった江川、三河山地から流下する豊川、吉田（豊橋）の南東部（渥美郡）方面から柳生川および梅田川と六条の川が流入する（六条の澪筋がある）干潟・浅場という意味であろう。明治期の干拓によって豊川河口の南側に神野新田ができ、柳生川の河口が梅田川のそれとほとんど同じ位置に変えられる以前は、それぞれの河口に独立の澪筋が存在していた。したがって、もともとの六条潟は、宝飯郡御津村の音羽川河口付近から渥美郡大崎村（現在の豊橋市南部）の梅田川河口付近まで、豊川河口の両側に広がる広大な遠浅の海域を示す呼び名であった。

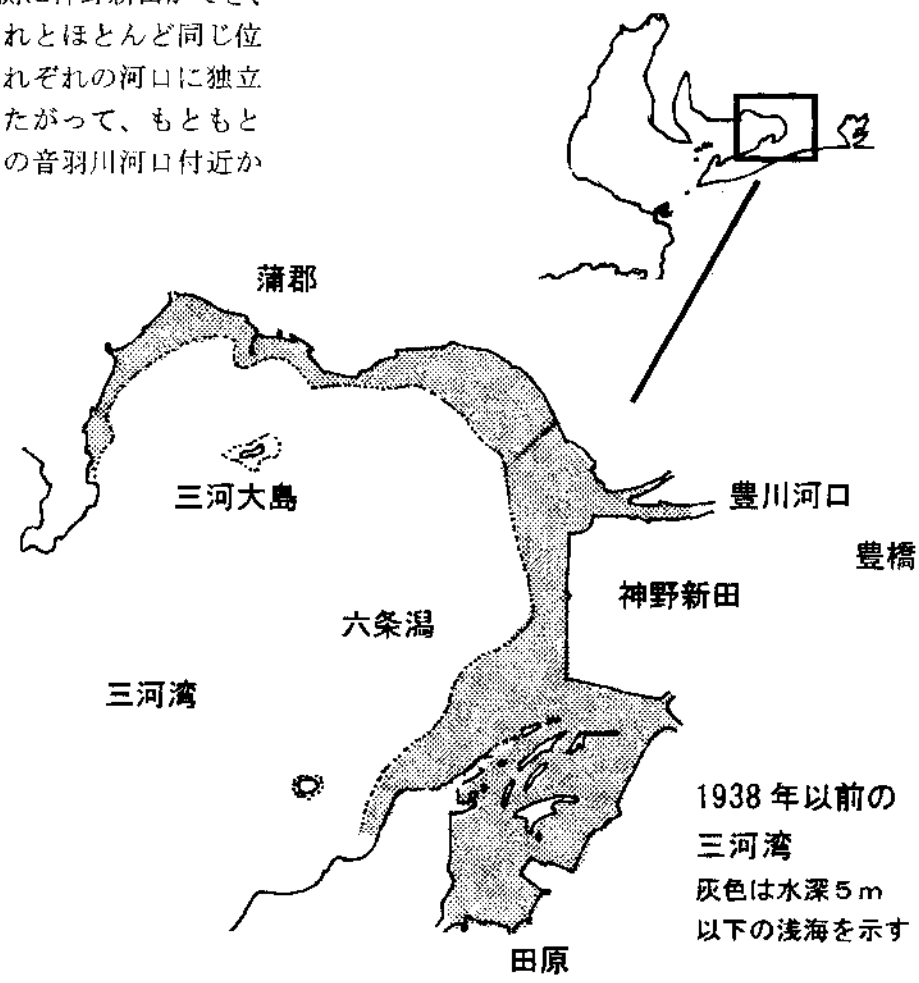
なお、六条潟は愛知県における海苔養殖の発祥地であり、アサリの稚貝が無数に発生する場所としてもよく知られている。

汐川干潟との位置関係

なお、バード・ウォッチャーによく知られている汐川干潟は、この六条潟の南端の大崎地先から砂州を南方向に回りこんだ位置にかつて存在した田原湾と呼ばれる広大な浅海の南端部分が埋立てを免れて残ったものである。この砂洲は大洲崎と呼ばれていて、蔵王山麓から北に張り出した浦半島の先端から東に伸びていた。かつての田原湾は、湾全体が干潟・藻場であり、波は静かで、魚介類の産卵や稚仔の生育の場として極めて優れており、三河湾の生態系の中で果たしていた役割は重大であったと推測される。（ここで、「大洲崎と呼ばれていた」と過去形で表現するのは、埋立て・浚渫によって現在は地形が一変して、トヨタ自動車田原工場の敷地と化して、もはや面影がなくなってしまったからである。）

三河港（渥美湾奥部）の臨海工業開発に伴う埋立て

名古屋南部や衣浦地区など、愛知県西部の開発より少し遅れてこの地域の工業開発計画が動き出したのは、1960年代後半である。1981年ま



での15年ほどの間に、1500ヘクタールの埋立てが愛知県によって行われた。その後の80年代の10年間は、合計140ヘクタール程度の埋立てで、落ち着いていたが、90年代には430ヘクタール（そのうち120ヘクタールはラグーナ蒲郡のリゾート開発）の埋立てが行われたため、この海域の汚濁状況は全国でも最悪のものとなった。夏季には広範囲に貧酸素水塊が発達し、それが浅場に湧昇する苦潮（青潮）の発生数は、東京湾を上回って日本一である。湾奥の浅海が大規模に埋立てられたため、浄化力が極端に落ちたことが汚濁の主要な原因である。

リゾート開発の埋立て計画に警鐘…「三河湾」出版（三河湾研究会）

リゾート開発「ラグーナ蒲郡」計画が銘打つ「環境保全型開発」の計画が93年に動き出した。ちょうどこの時期に西條八束氏（名大名誉教授）を軸に三河湾の汚濁問題についての研究会が、研究会を重ねて立ち上げられており、この計画に対する批判をこめて「三河湾」が出版されたのが97年である。同年、三河湾の再生をテーマとしたシンポジウムを、豊橋で三河湾研究会と地元産業界が参加する懇話会の共催で開いて、地元の世論に汚濁問題の深刻さについてアピールした。

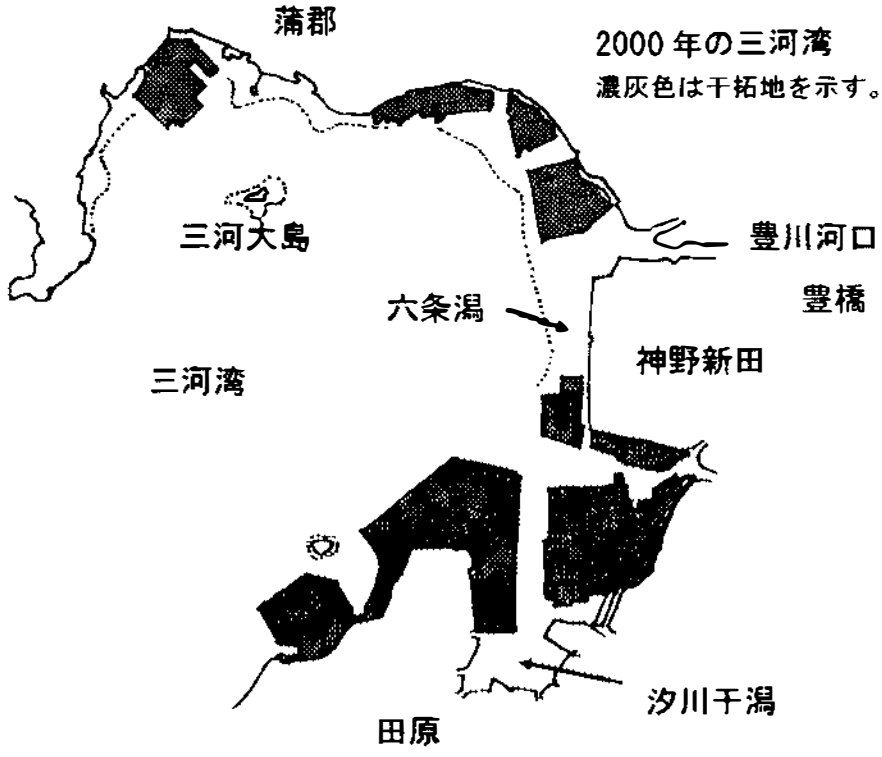
六条潟の埋立て計画に対して研究者有志が意見書を出す

そのような時期に、渥美湾奥に残る最後のまとまった干潟・浅場である六条潟の埋立て計画が動き出した。神野西地区の埋立て事業と呼ばれるこの事業計画は、99年2月に環境影響評価準備書が縦覧され、3月末が意見書の提出期限であった。三河湾研究会で埋立ての問題を明確に認識していたので、この準備書の問題点について、研究者有志として意見書を提出した。（自然保護団体にも呼びかけて、意見書を出す運動を行った。）

六条潟と三河湾を守る会の結成と活動

汐川干潟を守る会、渥美自然を守る会など、地元の自然保護団体・個人の応援を受けて、六条潟と三河湾を守る会を結成し、埋立て計画の撤回をめざす取り組みが始まったのは、この意見書を出す運動がきっかけであった。シンポジウムの開催、干潟見学会、署名運動、愛知県への要請行動、環境庁への要請行動など、99年以来取り組んできた。

結果として、この事業の環境影響評価書は完成することなく、次期の港湾計画改訂期（05年）を迎え、事実上取りやめになった。その最大の理由は、埋立て予定地にアマモ・コアマモの藻場があり、その代償措置のめどが立たなかったためである。準備書には豊川河口をはさんだ六条潟の反対側に人工藻場を造成して代償するとされていたが、専門家による検討委員会を設けて検討した結果、藻場造成が成功するめどが立たないことがはっきりしたため、この計画は頓



挫したのである。もちろん、過去の三河港関係の埋立て事業においてはほとんど出されなかった住民等からの意見書が多数出されたことが、安易な埋め立てをさせない結果を導いたことは間違いないであろう。

三河港港湾計画改訂案に保全の方向性

三河港港湾計画の改訂に向けて、愛知県は04年4月に六条潟の部分的保全の方向性を打ち出した。（日本一の）アサリ稚貝の発生場所として、水産面からの保全の要請があること、環境保全を考慮した港湾計画とすることなどを理由として、残存する六条潟の浅場の北側半分程度を保全するというものである。この港湾計画の検討委員会（幹事会）には、初めて市民団体の代表が参加する形がとられたが、実質的な審議がなされていないなど問題もある。環境保全策を十分に備えた港湾計画が練られるように切望するものである。

水鳥にとって重要な湿地・六条潟の保全

近年、六条潟付近で越冬するスズガモはかつてより減って1万羽程度であるが、昼間干潟の沖で大群をなして採餌しているのを防潮堤の上から観察できる。このほか蒲郡から六条潟・汐川にかけてホシハジロが数千羽越冬しているが、夜行性なので採餌場所がはっきりしない。主として六条潟で採餌しているのではないかと思われる。ただし、夏季に苦潮によって干潟・浅場の底生動物が壊滅した年の冬には、スズガモの越冬群はよそに移動し、ほとんど姿を見ない。

なお、渥美湾の奥部の三河港域は、蒲郡・御津地区、六条潟、および汐川干潟に分けて考えがちであるが、水鳥たちにとってみれば、一体の生態系であり、全体を保全していくことが重要であると考えられる。というのは、寒冷前線通過など強風が吹き荒れる場合には、水鳥たちは、地形的に風除けがある蒲郡方面に移動するか、防潮堤を風除けとして、神野新田の遊水池で休むなどする。年によって、あるいは時期によって場所ごとに餌動物の発生状況は異なると思われるので、あちこち移動しながら冬越しをしているのが実態であろう。したがって、汐川干潟あるいは六条潟のみ保全しても、水鳥たちにとっては安泰ではない。湾岸の浅場全体を保全する管理計画を創ることが必要である。

以上（2005.05.06　記）

ダイサギ

六条潟付近のウォッチング・サイト紹介

まず、六条潟へのアプローチであるが、道路地図を念頭に説明すると、浜松方面から国道1号を西に向かうと豊橋市役所西の（西八町）交差点で岡崎方面に北上して行くが、これを曲がらずにこそのまま西に向かって国道23号に入る。この23号を蒲郡方面に向かって進むと、新栄交差点で23号は北方向に曲がっていくが、これも曲がらずまっすぐ西に市道（かもめ街道）を進んで、突き当たったところが、豊橋総合スポーツ公園である。ここには駐車スペースがある。六条潟に面する防潮堤には、ここからシーパレスの建物の脇を抜けて徒歩でいける。体育館の南側を回り込めば、車でそのまま防潮堤の上に出ることも可能である。

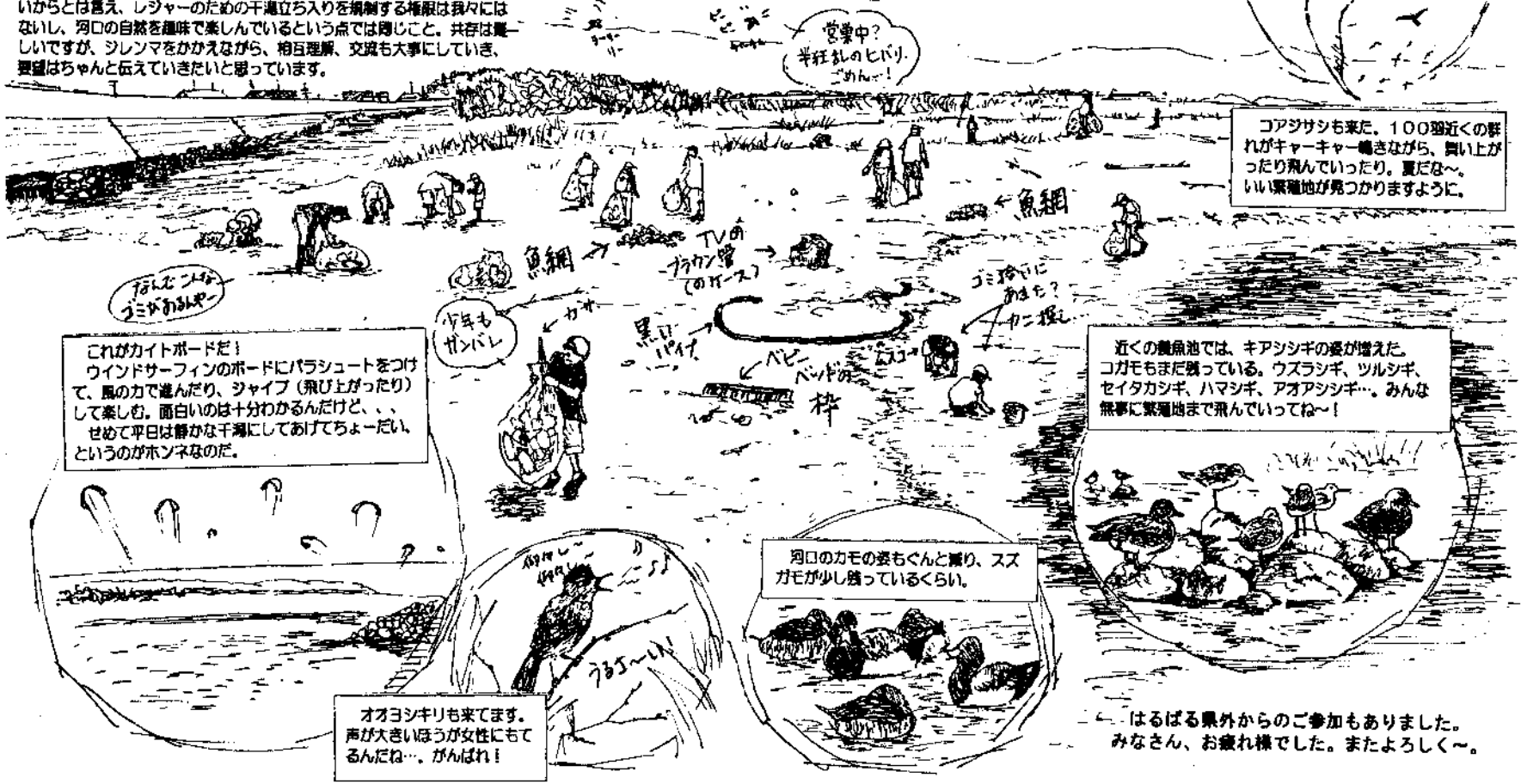
ミサゴの越冬地にもなっており、冬季の間、ほぼ確実にミサゴが漁をするのを見ることができる。防潮堤の内側は、干拓地の遊水池となっており、ここにもさまざまな水鳥をみることができる。

ふぁるこおばちゃんの 今日も鳥日和 その7

※カイトボーダーのみなさんには、野鳥の渡りのことなどお話して、河口部の干潟にはなるべく入らないこと、河口より沖の方で練習して欲しいことなど要望し、おおむねきちんと守っていただいています。野鳥の餌場を守りたいからとは言え、レジャーのための干潟立ち入りを規制する権限は我々にはないし、河口の自然を趣味で楽しんでいるという点では同じこと。共存は難しいですが、ジレンマをかかえながら、相互理解、交流も大事にしていき、要望はちゃんと伝えていきたいと思っています。

雲出川河口クリーンアップ大作戦 5月5日（祝）

雲出川河口でカイトボードをやっているみなさんから、河口の清掃の話があり、T氏の呼びかけで五主海岸に集結。急な話で、連休中にもかかわらず、３０名（子ども４名含む）近くのバーダーの参加があって、一安心。
総勢５５名ほどで午前中の２時間、清掃に汗を流しました。
それにしても、あるわあるわ、何でこんなにゴミがあるんでしょうね～。
折しもシギチの渡りシーズン、一汗流したあとのお楽しみは鳥見、、、と思ったら、あちらさんも思いは同じ、１０機ものカイトが空を舞っては、鳥も近寄ってはこないのであった…。



小坂里香（度会郡度会町）

私のバードウォッチング

竹林　康　（伊勢市）

何回目かの探鳥会の時ある程度は鳥の見分けもできかけた頃、薄暗い神宮林の中でクロジのオスを観た。野鳥図鑑では何度も観ておりあまり冴えない鳥だと思っていたが実際その鳥を双眼鏡のレンズのなかにして感動した。現在の双眼鏡の光学性能の高さにもよるかもしれないが、生きてる鳥の息遣いが私の心にせまってきた。おそらくバードウォッチングを始めた人の誰にもある経験だとおもう。定年退職して仕事のない自分にとって当然バードウォッチングにのめり込んで行く。種類を追い確証のカメラ撮影に躍起となり　カメラにフイールドスコープにと金をかけた。県内はもとより琵琶湖、輪島と足も広がり、それはそれで満足もし、納得もしている。しかしあのクロジを観たときの感動は少しずつ薄れていくようだった。

野鳥の会に入って僅か半年余りではあるが、毎日がウォッチング三昧の状態は、普通の人の二、三年を経過した様なものだ。もやもやとした雲の中に入りかけたそんな時、日本野鳥の会三重県支部長の「題名の無い研修会」が津であった。ひょっとしたらとの望みをもって研修会に参加した。そもそも自分の野鳥の会への入会の切っ掛けは、加藤幸子著の「私の自然ウォッチング」を読んだ事が起因することもある。人間が自然の中にあって鳥のことだけにかかわらず自分の存在する自然のあらゆる動植物を認識しようと、しようまいが人は生き，生涯を過ごすことはできる。しかし架空の世間の事ではなく、実在する自分の存在している自然のことをすべては不可能としても出来る限り知り、いとおしんで生きるのも人間の生だと確信する。

研修会は支部長が実物の植物あるいは動物の一部を示して自然に対して常に不思議の気持ちを持ち続けることが、ライフワークとしての「バードウォッチング」あるいは自然ウォッチング」と永くつきあって行く最良の方法であることを参加者に伝える題名が無いどころか、大きな題名のある二時間のアッという間の研修会であった。人は自分の中に対象物の知識があって初めて物が見え認識する。半年余りの経験者の私が長年の経験のある方々に「バードウォッチング」について語るのは恥知らずのことではあるが、今の自分が言えるのは、こんなところかもしれない。

これからも自然の中の不思議発見を心がけて行こうとおもいます。

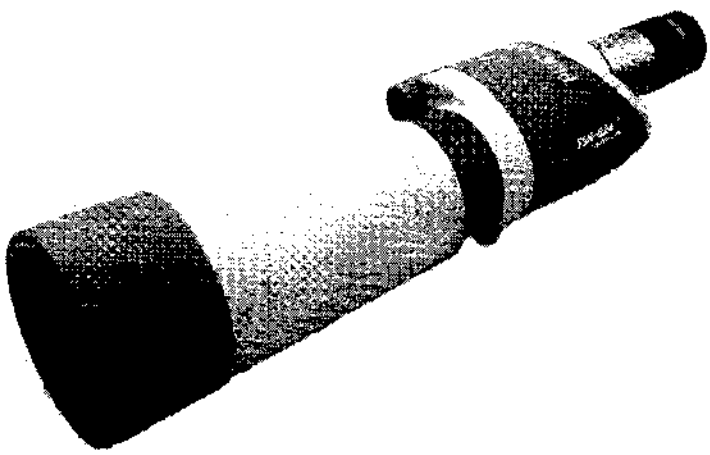
コウライアイサ

南島町沖で海鳥観察

嶋田春幸（度会郡南島町）

南島町は美しいリアス式海岸が続く海の町ですが、野鳥観察となると広大な干潟や葦原、田園地帯が無いのでシギ・チドリ類があまり見られないのが残念です。漁港でカモメ類、近所の林道で季節の野鳥の観察などが主な探鳥となっていますが、もの足りなくなって、時々伊勢平野にシギ・チドリを楽しみに行きます。そして２年ほど前から地元の海鳥を見たいという思いが次第に強くなり、昨年末から船で沖に出るようになりました。少しでも風や波があると沖に出ることが出来ませんし、小さな船であまり遠くまで行けませんので南島町贄浦～大紀町錦までの沖を主な観察場所としています。沖に出てよく見られる鳥は、カモメ類、ウミスズメ、カンムリウミスズメ、オオミズナギドリ、クロサギなどです。波が無いとき海原を鳥の群れを探して船を走らすのは楽しいですし、ウミスズメた

ちのかわいい姿や、オオミズナギドリが海面すれすれを滑空する姿は何度見ても良いものです。今年の３月には古和浦沖でウトウを発見、初めて見た北の海鳥に大感激しました。また沖の磯にはいつもクロサギがいて波打ち際で採餌しています。この鳥も私のお気に入りのひとつです。近くの島のアオサギやカワウのコロニーに５羽のクロサギを見ましたのでひょっとしたら繁殖が観察できるかもしれません。これからも海況が良い休日を選んで、無理しないように観察していきたいと思っています。
(カットも著者)



取扱商品

フィールドスコープ
双眼鏡(小型・大型)
天体望遠鏡
カメラ(新品・中古)
その他光学製品各種

取扱メーカー

KOWA・NIKON・FUJINON
MIYAUCHI・VIXEN・PENTAX他

中部地区最大の光学製品専門店

TELESCOPE CENTER EYEBELL

テレスコープセンターアイベル (株式会社アイベル)
〒514-0801 津市船頭町3412(メガネのマスダ2F) TEL 059-228-4119
定休日／毎週水曜日　営業時間／10:00～19:00
ホームページ http://www.eyebell.com　メールアドレス eyebell@diamond.broba.cc

野鳥と貨幣（お金には野鳥がいっぱい）

坂口　守（鈴鹿市）

1．野鳥と私

私たちは、生まれながらにして豊な自然の中に生き、樹木や花や、そこに飛び交う小鳥のこと、何の疑問も抱かず生活してきた。

私も20数年前に定年を迎え、自由の身となった或る日。万博公園の探鳥会で、イカルと出合った。雀、鴉の類しか知らなかった私は、目から鱗が落ちた。なんと可愛いい小鳥だろう。囀りも心頭まで届いた。以来、暇があれば鳥を求めて公園を散策したのであった。その都度、色々と先輩諸兄からお知恵を頂いた。探鳥会は自然と親しみ、浩然の気を養いながら野鳥が楽しめる。また。大勢の広い分野の方々との出会いもあり、これまた楽しい、その上に、バードウオッチングは中高齢者には適度の運動であり一石二鳥まことに得難い趣味である。早速、日本野鳥の会に入会、周辺の探鳥会には万難を排して参加ご指導を賜った。

2．野鳥の魅力

人類がこの地球上に誕生して以来、人々は鳥の魅力なかでも飛翔力に、驚嘆の眼差しで見てきたことだろう。その上に、可愛い、美しい、囀りもまた格別な楽しみがある。他の動物には無いスマートさは、私には別の世界が開けていったのであった。鳥は昔から人々に愛され、文学や民話、絵画の中に数多く登場している。最近では日本野鳥の会の支援で、バードウオッチングが健全な趣味として定着した。鳥たちがこのように私たちの心を捉えて離さない。それは、人間生活と共感の同じ自然の範囲で生活しているから益々親しさが感じられるのであろう。森を歩いていても、鳥たちとの出会いは、他の哺乳類との出会いとは感動が違うのである。

・・・野鳥はどこかに魅力が潜んでいるのである。

3．お金に野鳥がいた

日頃何気なく使っていたお金に鳥がいた。先人達も鳥には一目置いて、敬意を表したのであろう。命の次に大切なお金（貨幣）に数多くの野鳥が彫刻されたり、印刷されているではないか。お金こそ遠い昔から人々の栄枯盛衰、喜怒哀楽、幸、不幸に至るまで、これほど密接な繋がりのあるものは他に無い。何事も先立つものはお金だ。物心が付いてからお金の有り難さをしっかりと刻み込まれてきた私たちである。そのお金に野鳥がいる。驚きの再発見である。アテネオリンピックで有名なギリシアは古くから優れた文化があり、精巧な刻印のあるテトラドラクマ銀貨が使われていた。表面にはアテネの守護神の女神像、裏面にはアテナイの召し使い聖鳥だったフクロウとオリーブが刻まれている。フクロウの右側にギリシヤ文字Ａθが刻印されている。これは「アテネイ人のために」というギリシヤ語の最初の部分である、このデザインは紀元前１世紀のアテネイ銀貨の終焉まで標準型であったという。北海道でシマフクロウをみてすっかりフクロウの魅力に取り付かれた私は感動した。フクロウは古代から智恵者だった。95年ギリシヤを旅したが、貨幣単位はドラクマであった。2500年前から延々とドラクマが使用されているのである。驚くばかりであった。

4．お金（貨幣）って何だろう

遠い昔、中国では欲しい物を手に入れるため

アテネのテトラドラクマ銀貨
フクロウ

ニュージランド
キィウィ

グアテマラ
ケツァル

パプアニューギニア
極楽鳥

マレーシア
サイチョウ

アフガニスタン
ソチグロツル

には、物と物との直接交換をしていたが、不便であり、希少価値のあるものがその役目をしてきた。例えば、穀物や布、或いは宝石、貝などであったが不便であった。そこに現れたのが金属である。ヨーロッパでも金・銀は貨幣として全盛期を迎えた、かの有名な経済学者マルクスは「金銀は生まれながらにして貨幣ではないが、貨幣は生まれながらにして金銀である。」と意味深いことを述べている。それから銅・鉛・亜鉛・プラチナ・錫などが使われた。このようにコインして、貨幣文化ははじまった。

このコインに多くの名鳥が打刻されたのである。堪らない。今村仁司は「貨幣とはありふれたものだが、毎日それを使って人々は生活をしている。現在では貨幣は、それなしでは生活できない何者かである。いわば、空気、酸素みたいなものだ。」と、経済生活における人間特有のもので、動物には決してないものである。また、ある人は「お金とは第２の血液である。」とも言っている。

５．世界のコイン

コインとは、金属～通常金や銀、あるいは銅との合金から造られた貨幣の一つである。紀元前600年頃に始めて小アジアで始まり、その後、ヨーロッパ、地中海に、アジアはインドにと拡がった。東方では中国で始めて造られた。

コインは、考古学や歴史家が過去を解釈しようとする際の最も重要な情報源とされている。これは、人工物と比べて、言葉や像、年代が刻されているし、耐久性があるからでしょう。

大英博物館には５●万個を超えるコレクションがあり、また、毎年何万個が発行或いは発掘されていると言うことである。　この中から鳥のコインを掘り出すのである。どんな野鳥が飛び出すのか文献をめくった。世界のコインは、人物中心に発展してきた。どれを見ても、その生まれた時代の民族性、国民性、社会、経済状態などの歴史、地域性が凝集されていて、その価値は計り知れないと思う。私たちには当時の文化を伝えてくれる小さな使者なのである。現在世界の205の国や地域でコインが発行されていて、その数は約1000万種類と考えられる。日本が西欧のコインに初めて接したのは、16世紀頃、おそらく鉄砲伝来位と言われている。

この夥しいコインの中から、名鳥のコインを探すのである。世界にはその土地の風土、地球の開発によって進化をしていったであろう鳥も多くいるが、今では未開の各地には珍しい野鳥が棲んでいる。一般的に熱帯地方には種類が多い。例えばコロンビア1721種インドネシア1519種とか、今は羽根が進化して飛べない鳥も多い。ニュージーランドのキウイもその仲間。グァテマラの国鳥のケッツアル、ニューギニアの極楽鳥、モリーシャスのドード一今は絶滅したとか、オーストラリアのコトドリなど、これらの名鳥がコインに刻まれているのである。

日本のトキは絶滅寸前、日中友好のシンボルとして中国から贈られて来たトキから雛が誕生した。中国にはトキのコインがある。ヨーロッパでは1400年代から、双頭のワシが各国のコインに多く描かれた。アメリカでは誇り高き猛禽の白頭ワシは、人々から非常な賞賛を受け、イーグル貨という名称を与えられ親しまれている。（カットも著者；以下次号。編集部）

オーストラリア
コトドリ

カナダ
カナダヅル

ベリゼ
アジサシ

セーシェル
サンコウチョウ

中国
トキ

アメリカ
白頭鷲

2005年度三重県支部総会が開催されました！

5月29日、三重県総合文化センター（津市）において三重県支部総会が開かれました。
総会では19名の理事が選出され、三重県支部規則にのっとり第1回理事会で、支部長に杉浦邦彦氏、副支部長に市川雄二氏、高橋松人氏をそれぞれ選出しました。
なお、2005年度の支部体制は以下の通りです。

※地区体制について

市町村合併で、嬉野町、三雲町が松阪市に合併されましたが、当面両町在住の会員は今まで通り津地区に所属し、今後、松阪地区と津地区との交流を図り、1地区に合併するよう努めることにしました。

（総会の詳細は次号に掲載します。）

（文責：編集部）

支部活動の記録

事務局まとめ

● 支部活動の記録（2月～5月）

2/13 部長会議
3/6 第3回理事会
3/14 木曽岬干拓地整備事業アセス準備書についての意見書提出
3 各委託事業報告まとめ作業・報告書提出
3/21 支部報「しろちどり」46号発行・発送作業
3/29 事務局会議
3/30 国交省と松名瀬海岸堤防工事について打ち合わせ
4/19 津県民局農水産部へ打ち合わせ
4/23 保護部会
4/26 津県民局へ委託事業入札
5/3 津市神戸大釜池銃猟禁止区域設定に係る意見書を提出
5/5 五主海岸・清掃活動
5/29 2005年度総会・第1回理事会

● これからの予定（6月～　）
6　小鳥店調査
6　県・警察との合同パトロール
6/25 中部ブロック会議

お知らせ

☆お手伝いしていただけませんか？

三重県支部では、探鳥会が終わったあとや室内講座などで図鑑や野鳥グッズを販売しています。北勢地区・南勢地区で販売のお手伝いしていただける方を募集します。詳細については、事務局まで（090-1566-6010）

☆個人情報保護法の施行にあわせ、配慮するよう努めます。

この春から、個人情報保護法が施行されています。支部でも会員名簿や参加者名簿などの個人情報は、これまで以上に取り扱いに注意し厳重に管理する方向で検討します。

☆ご意見をお寄せください！

会の運営や方針について、皆さんからのご意見・ご要望を聞かせてください。
その他、皆さんの地域での話題など、どんなことでもかまいませんので、たくさんのお便りをお待ちしています。（事務局または編集部まで）

２００４年度第３回理事会

日時：３月６日（日）１３：３０～
場所：津市雲出市民センター
出席者１３名が、下記の項目について話し合いました。

1．木曽岬干拓地整備事業環境影響評価準備書に対する意見（案）について
2．探鳥会報告の記載方法
3．地区編成
4．来年度からの体制
5．各部　今年度の活動報告、来年度の計画
6．地区　今年度の活動報告、来年度の計画

三重県へ提出した木曽岬干拓地環境整備事業環境影響評価準備書に対する「意見書」概要

保護部

日本では数少ないチュウヒの繁殖場所である木曽岬干拓地に行われようとしている三重県の環境整備事業の準備書が出され、説明会も開催されました。準備書に対して、日本野鳥の会三重県支部として、上記の意見書を３月に提出しました。以前から協力して保護活動を行ってきた日本野鳥の会愛知県支部、名古屋鳥類調査会と日本野鳥の会本部などからも意見書が提出されました。三重県支部の提出した意見書の概要は以下の通りです。

・今回の工事目的にあるワンパク広場が緊急性、必要性がないものであり、また、知事自ら航空産業の拠点にと県議会で発言していることも今回の事業の必要性のなさを示していないか。

- チュウヒの繁殖を認め、その保全区を設置したが、繁殖に必要な面積が約５０ヘクタールと算出した根拠がない。
- 環境保全措置の効果の程度が不明であるとしながら、チュウヒについては現在確認されている３つがいの営巣が期待されるとしている。このことは科学的な根拠なしに準備書作成者の期待を書いただけではないか。
- 工事を始めて、繁殖に影響が出ても、工事を中止しないとなっているが、それならば、保全措置の有効性を確認してから工事に入らないのか。
- チュウヒ・ハイイロチュウヒ・コチョウゲンボウなどの多数の猛禽類がねぐらにしているが、そのことに対する影響評価がなされていない。
- １５年２月のねぐら調査でハイイロチュウヒが１７羽、チュウヒが５羽観察されているが、同月の我々のねぐら調査ではハイイロチュウヒ４羽、チュウヒ１９羽であった。ハイイロチュウヒが１７羽も観察されるようなところは今まで日本にはなく、同じように「腰の白い」チュウヒの雄とハイイロチュウヒの雌を誤認した可能性が高い。また、準備書記載者もハイイロチュウヒが希少種であるという認識がなく、多数ハイイロチュウヒが観察されたことに対して何らの評価もなく、鳥類に対する評価において未熟であったことを表している。
- ハイイロチュウヒの雌が多数観察されたと記載されているが、上記の誤認によると考えられる。
- 夏季にも観察されているオオタカについて、準備書では何も記載がないのはなぜか。
- 木曽岬干拓地周辺でイカルチドリの多数の観察例が記載されているが、コチドリやシロチドリの観察されている場所と重なり、誤認と考えられる。
- コシャクシギが海岸の干潟や泥地の平原や草原に生息するとなっていて、図鑑類などに記載されている「干潟などではほとんど観察されることはない」と記述と矛盾する。そして、コシャクシギが鍋田川河口部、木曽岬干拓地南部の木曽川沿いの堤防上で観察記録があるが、今までの観察例や図鑑などの説明とは矛盾している。
- チュウヒが音に敏感に反応して採餌行動を行っているのに工事の音に対する環境保全措置が「低公害型機械の採用」をすることだけである。チュウヒの行動を詳しく調べ、影響を検討したとも思えない。
- チュウヒの繁殖が行われている場所が限られている中で、当該事業でチュウヒ繁殖が減少することは確実であり、木曽岬干拓地で繁殖するチュウヒの重要性についての認識と繁殖個体の絶滅の可能性についての見解を求める。
- 準備書には矛盾・科学的根拠の欠落が多すぎる。再度の説明を求める。

（文責：近藤義孝）

野 鳥 情 報

保 護 部

種　名	個体数	観察日	場　所　（通　称）	備考・メモ	報告者
ヤツガシラ	1	2005/3/31	松阪市上川町　（施設駐車場）	植栽地面で採餌	杉井　隆
サシバ	1	2005/4/4	伊勢市宇治中村町（五十鈴川河畔）	初認記録	杉原　豊
オオルリ	1	2005/4/8	安濃町　（経が峰登山口）	初認記録	川口　久美

「三重県の野鳥記録連絡票」について

「しろちどり」前号、46号で、『野鳥情報について』を保護部からお知らせした。このたび、様式【三重県の野鳥記録連絡票】を以下に掲載しますので、情報を頂く際にお使いください。郵便やＦＡＸ（059-237-2040）で送って頂く場合はコピーして手書きで、Ｅメールの場合は、野鳥情報担当のメール・アドレスに連絡頂ければ、返信メールで様式（ＥＸＣＥＬファイル）を送りますので、これをお使いください。

なお、上記いずれの場合でも「野鳥記録連絡票」の報告内容を備えていれば、かならずしも本様式にこだわるものではありません。　（保護部）

【三重県の野鳥記録連絡票】

① 種 名(必須)	②雌雄／幼成	③個体数(必須)	④記録日時(必須)
＜例:セイタカシギ＞	＜例:雄／成鳥＞	＜例:1羽＞	＜例:12/30.150:00頃＞

⑤ 場 所(必須)	⑥行動・繁殖の有無等
＜例:三雲町曽原新田　通称○△池＞	＜例:浅瀬に立ち、採餌・羽づくろい＞

⑦ 記 録 方 法 ・ 判 断 基 準(必須)
＜例:視認のみ(写真・スケッチなし)。頭部黒色が濃く大きいので成鳥雄と判断＞

⑧記録報告者氏名および連絡方法　＜最も記録に関与した人＞(必須)	
・氏名	・連絡方法
＜例:野鳥　太郎＞	＜例:電話059－○×△－○×▽◇＞
⑨その他の記録者氏名(複数記入可)	⑩その他気がついたこと
※記録に立ち会った人	※その他の行動、飛翔、怪我の有無等

《記入にあたって》　（様式No.:三野保－1）

・注－1:項目名の太字箇所(①③④⑤⑦⑧)は必須項目です。必ず記入して下さい。

・注－2:本票の送付方法・送付先等については、機関紙「しろちどり」46号をご覧下さい。

宛先　保護部　野鳥情報担当

プライバシー保護

探鳥会報告　　2005年1月～4月

● 木曽岬干拓地探鳥会

（共催　愛知県野鳥保護連絡協議会）

2005年1月23日（日）

三重県木曽岬干拓地／愛知県鍋田干拓地

近藤義孝　村田芳雄　　参加者14人

カイツブリ（4）、カワウ（50）、ダイサギ（2）、コサギ（1）、アオサギ（1）、マガモ（30）、カルガモ（90）、コガモ（60）、オカヨシガモ（50）、オナガガモ（1）、ハシビロガモ（10）、ホシハジロ（10）、キンクロハジロ（7）、ミサゴ（5）、オオタカ（1）、ノスリ（1）、ハイイロチュウヒ（2）、チュウヒ（3）、チョウゲンボウ（2）、キジ（7）、タゲリ（20）、イソシギ（2）、ユリカモメ（2）、カモメ（5）、キジバト（50）、ヒバリ（2）、ハクセキレイ（9）、タヒバリ（15）、ヒヨドリ（5）、モズ（3）、ジョウビタキ（2）、シロハラ（2）、ツグミ（10）、ホオジロ（20）、アオジ（2）、オオジュリン（5）、カワラヒワ（30）、スズメ（300）、ムクドリ（30）、ハシボソガラス（300）、ハシブトガラス（60）、ドバト（100）。　計42種

冬の木曽岬・鍋田は猛禽類の天国、ハイイロチュウヒの雄が、目の前を飛んでいってくれた。木曽岬干拓地を埋め立て、ワンパク広場にする計画が進められようとしている。意味のない公共事業をとめ、干拓地を次の世代に役立つようにしないといけない。

● 鈴の森公園探鳥会

2005年1月23日(日) 9:30-12:00

松阪市川井町鈴の森公園、坂内川周辺

谷口ひろ子、小津みゆき 参加者14名(会員12人、会員外2人)

カイツブリ、カワウ、コガモ(60)、トビ、チョウゲンボウ、クサシギ、イソシギ、ユリカモメ(100)、キジバト、キセキレイ(3)、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、イソヒヨドリ(1♂)、ツグミ、メジロ、アオジ(8)、カワラヒワ(19)、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 計24種

雨が降らないかと心配しましたが、終わりの方には薄日がさし当初心配した寒さも無く無事終わることが出来ました。昨年の台風、大雨等で坂内川の芦原群が無くなり、鳥の数も少なくなった様に思います。カワセミ、ジョウビタキ、バン等の出現を期待していましたが残念、遭遇できませんでした。でもイソヒヨドリ♂、チョウゲンボウ♂に出会えたことは幸いでした。一般の参加者が少なかったです。

● 宮川・外城田川探鳥会

2005年1月27日(木) 9:30-11:30

伊勢市磯町

西村泉 山田昭子 参加者16人(会員13人、会員外3人)

ハジロカイツブリ(4)、カンムリカイツブリ(2)、カワウ(15)、ダイサギ(1)、アオサギ(1)、マガモ(1)、コガモ(100)、オカヨシガモ(250)、ヒドリガモ(18)、ホシハジロ、(200) キンクロハジロ(150)、スズガモ(200)、ミサゴ(4)、トビ(5)、ケリ、イソシギ、ユリカモメ(150)、セグロカモメ(28)、オオセグロカモメ(2)、ウミネコ(15)、キジバト(4)、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、シロハラ、ツグミ(3)、メジロ(5)、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 計33種

天候が穏やかで暖かかったので、のんびりと楽しむことが出来た。欲を言えばもっと沢山のカモが見られるのに、今年は約半分だったことが残念。

● 余野公園探鳥会

(共催 日本野鳥の会 京都支部)

2005年1月30日(日) 10:00-14:00

伊賀市柘植 余野公園内

前澤昭彦 塗矢尋一 参加者24人(会員18人、会員外6人)

トビ、ハイタカ、キジバト、カワセミ、コゲラ、キセキレイ、ハクセキレイ、ビンズイ、タヒバリ、ヒヨドリ、モズ、ルリビタキ、ジョウビタキ、ツグミ、ウグイス、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、シメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 計26種

当日朝、雨が降っていたが、10時ごろにはあがってくれた。少し寒かった。京都支部から、参加していただいたが、目当てのオオマシコ、ベニマシコは出なかったのでショックでした。全体に小鳥が少なかった。日差しが出ると小鳥のほうも少々多くなるかな。

● 五十鈴川定例探鳥会

2005年2月3日(木) 9:00-11:00

伊勢市今在家町・五十鈴川周辺

林淳子 加島隆子 参加者7人(会員4人、会員外3人)

トビ(2)、オオタカ(1)、ハイタカ(1)、キジバト(1)、アオバト(2)、カワセミ(1)、コゲラ(4)、ハクセキレイ(1)、ヒヨドリ(7)、ルリビタキ(♂1、♀1)、ジョウビタキ(♂1)、シロハラ(5)、エナガ(12)、ヤマガラ(10)、シジュウカラ(7)、メジロ(10)、アオジ(8)、クロジ(♂1、♀1)、スズメ(3)、ハシボソガラス、ハシブトガラス 計21種

寒い日だったがルリビタキ、クロジ、ヤマガラ、シジュウカラ、コゲラ等賑やかに出現。この日は望遠鏡が持参できなかったが、その分参加者は自分の目でしっかりと観察出来、鳥探しもしっかり会得しました。

● 五十鈴公園探鳥会

2005年2月6日(日) 9:00-11:30

伊勢市宇治浦田町 五十鈴公園

杉浦邦彦 林淳子 吉居瑞穂他 参加者37人(会員32人、会員外5人)

アオサギ(1)、ミサゴ(1)、トビ(1)、ノスリ(1)、イカルチドリ(2)、イソシギ(1)、キジバト(1)、カワセミ(1)、コゲラ(3)、キセキレイ(1)、ハクセキレイ(1)、セグロセキレイ(3)、タヒバリ(3)、ヒヨドリ(9)、モズ(1)、ジョウビタキ(♀1)、イソヒヨドリ(♀1)、トラツグミ(2)、シロハラ(8)、ツグミ(5)、シジュウカラ(4)、メジロ(8)、ホオジロ(8)、カワラヒワ(3)、スズメ(3)、ハシボソガラス(7)、ハシブトガラス(9)、ドバト(7)、カモメ sp 計29種

鳥合せの後、必ずなにか保護に関係することを5～10分ほど話し合って終わりたい。南勢地区の会員のお陰で観察会に出席される人達が少し

ずつ増加している。ご協力いただいて感謝しています。

● 木曽三川探鳥会

2005年2月6日(日)

桑名市多度町、愛知県海部郡立田村

近藤義孝　村田芳雄　　参加者11人

カイツブリ、カンムリカイツブリ、カワウ、アオサギ、コハクチョウ、マガモ、カルガモ、コガモ、トモエガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ノスリ、チュウヒ、オオバン、コチドリ、ケリ、タゲリ、タシギ、ユリカモメ、キジバト、カワセミ、ヒバリ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ジョウビタキ、ツグミ、シジュウカラ、ホオジロ、カシラダカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト　計42種

揖斐川では目当てのチュウヒなどが観察できなかったが、木曽川でコハクチョウやチュウヒに出会えた。揖斐川は狩猟が行われ、カモ類がほとんどいなかったが、木曽川ではカウントできないほどのカモ類がいた。

● 津偕楽公園探鳥会

2005年2月20日(日)　10:00-12:00

津市偕楽公園

岡八智子　斎藤加代子　　参加者29人（会員27人、会員外2人）

キジバト、コゲラ、ビンズイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、シロハラ、ツグミ、ウグイス、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、シメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト　計20種

沢山の参加なので子供中心、初心者、ベテランと3班に分れ、ゆったり探鳥出来た。将来有望な子供たちの熱心さに驚きました。

● 月ヶ瀬無限峡探鳥会

2005年2月27日(日)　10:00-12:00

奈良県月ヶ瀬村

塗矢尋一　　参加者16人（会員10人、会員外6人）

カイツブリ（1）、カワウ（1）、オシドリ(30)、カルガモ（14）、トビ（1）、オオタカ（1）、ノスリ（1）、コジュケイ（6）、イカルチドリ(2)、イソシギ（1）、アオバト（3）、ヤマセミ（2）、キセキレイ(4)、セグロセキレイ（6）、カワガラス（1）、ルリビタキ（1）、ジョウビタキ（2）、ウグイス（12）、エナガ（10）、シジュウカラ（2）、ホオジロ（2）、ハシボソガラス（4）　計22種

待望のオシドリを初め1羽確認した。少したつと川のすみからゾクゾクと出てきてオスメス合わせて30羽になってすぐ近くで見られて喜んだ。そのあとでヤマセミがゆっくりと見られとてもよかった。初めての方もいたので大変喜んでくれた。

● 木曽岬干拓地探鳥会

（共催　愛知県野鳥保護連絡協議会）

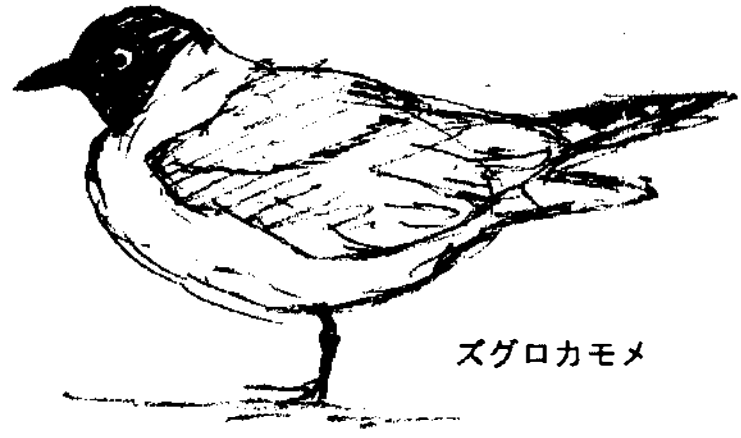
2005年2月27日(日)

三重県木曽岬干拓地／愛知県鍋田干拓地

近藤義孝　村田芳雄　　参加者18人

カイツブリ（24）、カワウ（20）、ダイサギ（3）、コサギ（1）、アオサギ（1）、マガモ（10）、カルガモ（57）、コガモ（100）、オカヨシガモ（45）、ハシビロガモ（7）、ホシハジロ（17）、キンクロハジロ（15）、ミサゴ（3）、トビ（1）、ノスリ（4）、ハヤブサ（1）、コチョウゲンボウ（1）、キジ（2）、ケリ（6）、タゲリ（8）、クサシギ（1）、イソシギ（3）、キジバト（10）、ヒバリ（4）、ハクセキレイ(4)、セグロセキレイ(1)、タヒバリ(20)、ヒヨドリ（3）、モズ（1）、ジョウビタキ（2）、ツグミ(50)、ウグイス（1）、ホオジロ（14）、アオジ（3）、オオジュリン（10）、カワラヒワ（29）、スズメ（300）、ムクドリ（30）、ハシボソガラス（300）、ハシブトガラス(200)、ドバト(70)　　計41種

今回は、チュウヒ、ハイイロチュウヒはお休みだった。コチョウゲンボウが餌を食べているのが観察できた。



ズグロカモメ

● 海蔵川定例探鳥会

2005年3月1日(火) 9:40-11:45

四日市市西坂部町

尾畑玲子 高和義 参加者9人(会員7人、会員外2人)

カルガモ(20+)、キジ(1)、ケリ(1)、キジバト(2)、ヒバリ(3)、ハクセキレイ(2)、セグロセキレイ(6)、モズ(3)、ツグミ(6)、ウグイス(1)、ホオジロ(4)、カシラダカ(10+)、アオジ(2)、カワラヒワ(5)、スズメ(10+)、ムクドリ(3)、ハシボソガラス(2)、ドバト(10+) 計18種

鈴鹿山脈から吹き降ろす寒風にさらされたが、好天には恵まれた。鳥の種類は少なかったけれど、桜の幹で集団越冬するヨコズナサシガメをみたり、会員に川の流れと生き物の係わりについての説明をしていただいたりして、野鳥だけにとどまらない多様な観察会だった。

● 五十鈴川定例探鳥会

2005年3月3日(木) 9:00-10:45

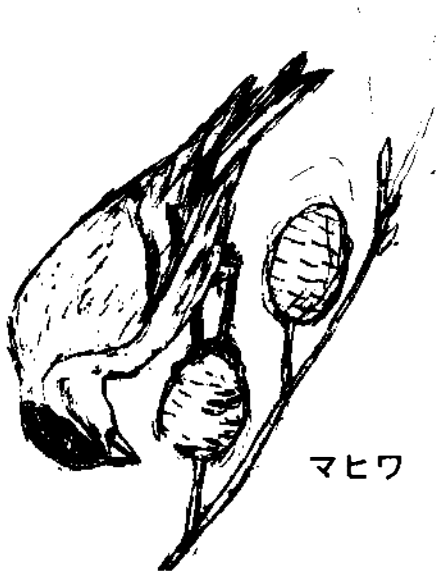
伊勢市今在家町

吉井瑞穂 加島隆子 参加者8人(会員7人、会員外1人)

トビ(1)、ノスリ(1)、キジバト(1)、カワセミ(1)、コゲラ(8)、キセキレイ(1)、ハクセキレイ(1)、セグロセキレイ(1)、ヒヨドリ(8)、ルリビタキ(♀1)、ジョウビタキ(♂1)、シロハラ(2)、エナガ(5+)、ヤマガラ(7)、シジュウカラ(8)、メジロ(1)、アオジ(2)、カワラヒワ(1)、スズメ(1)、ハシボソガラス(1)、ハシブトガラス(3)

計21種

探鳥会を終えて駐車場に戻ってきたところ、イカル50位とアオゲラ♂が目の前に。じっくりと観察でき、少しもの足りなかった探鳥会もこれで満足。でもこれを見られたのは5人だけ、あとの3人の方には御免なさい。



マヒワ

● 石垣池探鳥会

2005年3月6日(日) 10:00-12:00

鈴鹿市西玉垣町石垣池

市川雄二 市川美代子 尾畑玲子 参加者25人(会員11人、会員外14人)

カイツブリ、カワウ、コサギ、アオサギ、マガモ、カルガモ、コガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ(♀)、バン、ユリカモメ、キジバト、コゲラ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ジョウビタキ(♀)、シロハラ、ツグミ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 計31種

市の広報などを見て非会員の方が14名来てくださった。31種と多くの鳥と会えました。

● 宮川中流探鳥会

2005年3月11日(金)

度会町宮リバー度会パーク周辺

小坂理香 山田昭子 雨天のため中止

● 篠田山探鳥会

2005年3月19日(土) 9:30-12:00

松阪市久保町

宮田たつ 中村洋子 参加者16人(会員15人、会員外1人)

ミサゴ(1)、トビ(1)、コジュケイ(1)、キジバト(3)、コゲラ(7)、ビンズイ(4)、ヒヨドリ(8)、ジョウビタキ(2)、ツグミ(2)、ウグイス(6)、エナガ(13)、ヤマガラ(3)、シジュウカラ(6)、メジロ(4)、アオジ(8)、カワラヒワ(20)、ムクドリ(1)、ハシボソガラス+ハシブトガラス(20)、ドバト(10) 計20種

ウグイスの初鳴を聞けた。初心者に楽しんでもらえたと思う。

● 木曽岬干拓地探鳥会

(共催 愛知県野鳥保護連絡協議会)

2005年3月27日(日)

三重県木曽岬干拓地/愛知県鍋田干拓地

近藤義孝 村田芳雄 参加者16人

カイツブリ(10)、カワウ(30)、ダイサギ(4)、アオサギ(6)、マガモ(2)、カルガモ(15)、コガモ(140)、オカヨシガモ(20)、ハシビロガモ(9)、ホシハジロ

(12)、キンクロハジロ (12)、ミサゴ (3)、トビ (1)、オオタカ (1)、チュウヒ (3)、キジ (3)、ケリ (15)、タゲリ (14)、クサシギ (1)、イソシギ (1)、カモメ (1)、キジバト (3)、カワセミ (1)、ヒバリ (10)、ツバメ (2)、ハクセキレイ (6)、タヒバリ (3)、ヒヨドリ (5)、モズ (3)、ジョウビタキ (1)、ツグミ (10)、ホオジロ (1)、カワラヒワ (3)、スズメ (300)、ムクドリ (20)、ハシボソガラス (100)、ハシブトガラス (40)、ドバト (50)

計38種

干拓地の上をチュウヒが飛んでくれた。今年もうまく繁殖できるといいのだが。

● 松阪ベルファーム探鳥会

(共催　松阪ベルファーム)

2005年4月2日(土)　10:00-12:00

松阪市伊勢寺町 松阪ベルファーム

中村洋子 水森和子　　参加者21人(会員19人、会員外2人)

カイツブリ (1)、カワウ (2)、アオサギ (1)、カルガモ (2)、コガモ (7)、ヨシガモ (2)、ヒドリガモ (6)、ハシビロガモ (15)、ホシハジロ (4)、キンクロハジロ (12)、キジバト (1)、カワセミ (1)、ヒバリ (5)、ツバメ (1)、セグロセキレイ (1)、ヒヨドリ (10)、ツグミ (3)、カシラダカ (3)、アオジ (1)、カワラヒワ (5)、スズメ (2)、ムクドリ (2)、ハシボソガラス (10)、ハシブトガラス (1)。計24種

昨年4月農業公園として開園され、池にカモが7種類いました。今後どのように変化するのか見守りたいです。

● 五十鈴公園バードウォッチング

2005年4月9日(上)　9:30-11:30

伊勢市宇治浦田町　五十鈴公園

小坂理香 山田昭子　　参加者14人(会員10人、会員外4人)

トビ(1)、キジバト (2+)、コゲラ (2+)、ツバメ (3+)、セグロセキレイ (1)、ビンズイ (C)、ヒヨドリ (5+)、アカハラ (2)、シロハラ (5+)、ツグミ (5+)、ウグイス (S 1)、エナガ (4+)、ヤマガラ (2+)、シジュウカラ (3+)、メジロ、ホオジロ (2+)、アオジ (2+)、カワラヒワ、イカル (5+)、スズメ、ムクドリ (2)、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト　　計　24種

桜が満開で楽しいお花見探鳥会となりました。桜を散らす犯人(鳥)を発見できなかったのは残念でしたが、浮かれ気分のシロハラの歌やカラ類のさえずりが聞かれ、アカハラの姿もじっくり見られてまずまずでした。一般の参加者が少なくＰＲ不足を痛感しました。

● 藤原岳山麓探鳥会

2005年4月16日(上)　9:30-11:30

いなべ市藤原町(大貝戸～坂本)

加藤光弘 楢原秦　　参加者7人(会員6人、会員外1人)

アオサギ、キジ、ケリ、コゲラ、ヒバリ、ツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、カワガラス、ウグイス、キビタキ、オオルリ、エナガ、ヤマガラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

計24種

久し振りに目撃できたキビタキに一同感激する。

● 干潟を守る日・五主海岸探鳥会

2005年4月17日(日)　14:00-16:00

松阪市三雲町五主

多田弘一 中村みつ子　　参加者38人(会員26人、会員外12人)

カワウ (62)、ダイサギ (7)、コサギ (3)、アオサギ (6)、マガモ (33)、ヨシガモ (1)、オナガガモ (6)、キンクロハジロ (2)、スズガモ (85)、ウミアイサ (5)、トビ (1)、コチドリ (1)、シロチドリ (7)、メダイチドリ (11)、トウネン (1)、ハマシギ (270)、オオソリハシシギ (14)、チュウシャクシギ (1)、ユリカモメ (160)、セグロカモメ (31)、オオセグロカモメ (2)、カモメ (3)、ウミネコ (3)、ヒバリ (1)、ツバメ (5)、ハクセキレイ (1)、カワラヒワ (2)、スズメ (3)、ハシボソガラス (3)

計29種

天候に恵まれ参加者も多く，干潟を守る日のアピールが出来た。多田氏より8年前のデータを資料として頂き，シギ、チドリの個体数変化が分かり今回の探鳥会のテーマである干潟の重要性を明確に示していただいた。夏羽のチュウシャクシギ、ハマシギ、メダイチドリ、ユリカモメ等楽しく観察することが出来た。

● 海蔵川定例探鳥会

2005年4月19日(火)　9:40-12:30

四日市市西坂部町

尾畑玲子　高和義　　参加者9人(会員8人、会員外1人)

カイツブリ (1)、チュウサギ (7)、アオサギ (2)、カルガモ (12)、キジ (2)、コチドリ (3)、イカルチドリ (3)、ケリ (1)、イソシギ (2)、キジバト (5)、カワセミ (1)、ヒバリ (2)、ツバメ (11)、ハクセキレイ (1)、セグロセキレイ (3)、ビンズイ (1)、ヒヨドリ (13)、モズ (3)、シロハラ (1)、ツグミ (5)、セッカ (1)、シジュウカラ (1)、ホオジロ (9)、アオジ (4)、カワラヒワ (5)、スズメ (12)、ムクドリ (8+)、ハシボソガラス (4)、ドバト (4)　　計29種

コースの途中に人だけが渡れる橋がある。ここから眺める海蔵川は美しく、野鳥を沢山観察できるポイントになっている。支流が合流するところなので、より豊かな環境を保っており、クイナがよく見られることから参加者のSさんが「くいな橋」と呼ばれた。我々の探鳥会の中でもこの名前を使っていきたい。ちなみにこの下流には「しらさぎ橋」という人道橋がある。

● 県民の森探鳥会
(共催　三重県民の森)
2005年4月23日(土)　9:30-12:10
三重郡菰野町　三重県民の森
矢田栄史　辻秀之　　参加者44人(会員23人、会員外17人、不明4人)
トビ、タカ(sp)、コジュケイ、キジバト、ツツドリ、コゲラ、ツバメ、イワツバメ、ビンズイ、サンショウクイ、ヒヨドリ、ルリビタキ(C)、アカハラ、シロハラ、ツグミ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ヤマガラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、ニュウナイスズメ、スズメ、カケス、ハシブトガラス　　計31種
お楽しみの夏鳥が9種もでた。オオルリはまださえずりも絶好調ではなく、木のてっぺんには出てこない。エナガの巣、コゲラの巣穴作りなど観察。出現種数はこの探鳥会で最多だと思う。

● 木曽岬干拓地探鳥会
(共催　愛知県野鳥保護連絡協議会)
2005年4月24日(日)
三重県木曽岬干拓地／愛知県鍋田干拓地
村田芳雄　　参加者15人
カイツブリ(2)、カワウ(50)、ササゴイ(1)、ダイサギ(3)、コサギ(2)、アオサギ(8)、カルガモ(20)、コガモ(40)、ハシビロガモ(1)、ミサゴ(2)、トビ(2)、オオタカ(1)、チュウヒ(3)、キジ(10)、コチドリ(6)、ケリ(30)、クサシギ(3)、イソシギ(1)、チュウシャクシギ(2)、キジバト(7)、カワセミ(2)、ヒバリ(15)、ツバメ(5)、ハクセキレイ(1)、タヒバリ(1)、ヒヨドリ(2)、モズ(1)、ツグミ(10)、ウグイス(1)、セッカ(10)、ホオジロ(2)、カワラヒワ(2)、スズメ(60)、ムクドリ(20)、ハシボソガラス(300)、ハシブトガラス(60)、ドバト(14)　　計37種

小学2年生の男の子を連れた親子を車に乗せましたが、今までにどんな鳥に一番興味があったかと聞いたところ「イヌワシ」という返事がかえってきてびっくりしました。伊那の方で見たそうです。鳥への最初の興味は飛んでいるトビだったということです。

スジエビ

編集後記

「しろちどり」の編集を始めてから早や2年経った。これで、支部の役に立っているのだろうか？一号を出すとすぐ次の号、どんどん追いかけて来る。編集子が頭をひねりながら、次の号を考える。やってみたい特集はあれこれとあるが、原稿が集まるのだろうか？県内の自然でも野鳥でも案外と調べられていないことが多い。いささか不安でもある。世はインターネットの時代。ウェブで見ればどんな情報でもある。しかし、本当にそうであろうか？この支部報を価値のあるものにしたい。支部会員諸氏の積極的投稿を期待する。(M.H.)

しろちどり　47号
2005年6月15日発行
題字：　濱田　稔
表紙絵：　川口久美
カット：　杉原　豊・坂口　守・
嶋田春幸・平井正志
編集：平井正志　〒514-2325
安芸郡安濃町田端上野910-49
発行所：日本野鳥の会三重県支部
杉浦邦彦方
〒516-0026　伊勢市宇治浦田2丁目9-4
http://www.amigo2.ne.jp/~miebirds/
印刷：伊藤印刷株式会社
〒514-0027 津市大門32-13